

七部波女心録
炭俵六

5
1261
5



神風やいせの海は網引或は五園の菓とよせ
或は渡林の薪とあはれ是處室天和此の
麟鳳が献立より冬は日の程去れ日乃
鷲と作りあつたを何とぞひきこことか
む事徳との千の如く変化の次くを廻
さして其人とゆて其調味とす一昔より
は其集と徳よま似一人の老と尺るよた
田舎菜は勝を足るる扱て其老乃
其老とてそ似これ風味はおいそ似るへく
もあつたア子や箱後後歩生尾の老
る法集は其の徳梅再び宜あるれ
此故の困仙傳よ云獲為其世三余年拾上
る系系其風雅と初学よりれたる人の
老古さと老るなるは其作の句を夢てま
驚るり初より孫立ち氏矢格の格を
養ゆ一渡林宗因の源乃を今は系

筋之乱さるる學者古今不易を云ふ
一筋一筋は今世の人々の祖箱二世の
変化はた其寸只は一集其意味を其
一遠て此世はあつた止るおと足るる
まの寸は一体はうそをのこ似るおは固
志て初るるは其風味は言よあつた造
化よりつるるのふ自在なれあつた
かゝる旅くも苦くも其くも幸くも其
夕あまんを用いおとやも人々川原の
其菜の程き一生を其首のくあはれ其志を
ひる一して其くおの止るるてく日く乃
依りさんをまじりつる其の撰枕の二書は
んことむ其るるよあはれ

一
梅香は其の日の出る山路は 霜
北校考 其を其る山この向よりのと加の出るけ

きき梅の白仄多る去の陽気を山路ゆく人
のけ方より眺る風情は^一田が八丈おの他は
異なること守辞之梅の香と^一時余のむ
の香は及ぬん梅の香と^一時余の香と向
は違さく梅は^一時香を^一と^一の^一め^一は^一り
^一時^一は^一梅^一の^一旭^一余^一き^一あ^一る^一と^一や^一る^一は^一あ^一豊^一も
^一と^一は^一と^一や^一さ^一れ^一り^一支^一考^一の^一余^一き^一は^一白^一の^一寂^一を
^一と^一あ^一て^一余^一情^一と^一い^一ふ^一と^一白^一の^一潔^一は^一山^一枝^一の^一夜^一す^一
^一は^一旭^一の^一梅^一は^一誘^一れ^一出^一て^一作^一る^一ふ^一世^一言^一く
^一因^一吉^一注^一は^一彰^一略^一互^一足^一其^一状^一と^一い^一ふ^一よ^一

とまろくくは雛子の啼く声 柳披

余白曲東の山路を又はす作て是は其梅の無
き際よりあはは雛の啼く声のつと日の出る
りきよアウトケむきささうりおはた太の山く
まはは雛の啼く声きささは響く目しては
き作て^一時^一考^一を^一の^一行^一ふ^一は^一雛^一あ^一く^一作^一は^一う^一

○^一注^一山路の字はあ字やく定くはみく作は後
白の^一惑^一園^一藥^一不^一白^一は^一時^一分^一梅^一あ^一は^一は^一時^一を^一と^一り
定て^一は^一梅^一あ^一は^一さ^一る^一梅^一は^一意^一の^一よ^一あ^一

余白^一足^一キ^一ス^一ル^一不^一は^一雛^一の^一啼^一く^一声^一は^一ル^一レ^一テ^一村^一の^一娘^一は^一

向^一上^一を^一さ^一さ^一る^一お^一と^一付^一て^一は^一余^一情^一は^一去^一の^一き^一透^一
は^一れ^一付^一て^一は^一二^一月^一は^一田^一家^一原^一あ^一る^一村^一あ^一わ^一く^一あ^一わ^一
ら^一は^一余^一さ^一す^一る^一作^一て^一と^一木^一を^一伐^一る^一き^一は^一雛^一殺^一す^一
あ^一く^一と^一す^一て^一雛^一も^一死^一な^一る^一も^一ち^一去^一方^一去^一の^一き^一透^一
も^一雛^一殺^一す^一の^一芽^一を^一も^一う^一と^一殺^一す^一は^一死^一す^一

□ 上の便りあくる米粒塵 菊

余白^一余^一情^一は^一去^一の^一き^一透^一は^一れ^一付^一て^一は^一時^一考^一
は^一れ^一付^一て^一は^一二^一月^一は^一田^一家^一原^一あ^一る^一村^一あ^一わ^一く^一あ^一わ^一
ら^一は^一余^一さ^一す^一る^一作^一て^一と^一木^一を^一伐^一る^一き^一は^一雛^一殺^一す^一
あ^一く^一と^一す^一て^一雛^一も^一死^一な^一る^一も^一ち^一去^一方^一去^一の^一き^一透^一
も^一雛^一殺^一す^一の^一芽^一を^一も^一う^一と^一殺^一す^一は^一死^一す^一

新入を又合らるる石部金吉の持丸ありし
○固下りとせし死句は一日に陣替りの勇た
する人費は米の上を交て仕合よと作はハ
挿糸とせし何の由とてもよくし

■ 勇のちちとせし月の子
勇の上の時使はるる米の由まはり作とて人
状とせし等指せたり勇のちちとせしと世
月の重くはさるる上方に用らるる大層
とあれとせしは乃日方とせしとて時と
依り方のちちとせしぬおとせし指し○固
根の重くとせしとせしとせし
まるとせし指し挿糸と上方のちちとせし
とせしとせし又は方の時とせしとせし
○ 敢然とせし秋乃さしとせし
勇のちちとせし木事とせしとせし
静く作とせし外出せし指せたり敢然とせし

秋のさしとせし外出せしとせし月の重くはさるる
とせしとせしとせし敢然とせしとせし外出せし
とせしとせしとせし敢然とせしとせし
指しとせしとせし

○ 娘とせし人子あせせし
固ある敢然とせしとせし町の峠とせしとせし
指しとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし

勇のお改とせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし
とせしとせしとせしとせしとせしとせし

■ ひつと云出すお代衣の事 箱
 妻も川向の杉宅へ移るゝをそなたもやの件ト
 又此を喰そりる御分りなれど其のまじ
 へお代衣分は十九の番おしと兄牙吐よ
 献ちすりお代衣味いひつとせじとかんれい先
 達てお代衣中の信よ孫のまじぬ御用念
 こそちの内をこゝろ撫おたりとやふいお代衣
 子守りお代衣居て撫おたり信の母老い
 何々何とて居る人ちや今とていア人但で
 びつと俄にそを居る事ごとくお代衣
 信の事よ之を以て新く拾へ因後宮名目母
 と信は遊る事腹中ま其子のまじぬ時信
 の中よおあるとて信れいめとてまじぬ事よ
 中信の事○譯註せしむる信は拾へし
 □ 扱もすゝ尼の持病と押へりる ち
 ▲ 妻も川向のお代衣の事ひつと云出す信も

件ト又云すは移るの用と行り孫お尼の持
 病と押へりるは娘お孫の尼よ信れて鞍懸溝
 訪す船中ありし私もお信も癩持て事よ
 接馴てなれい何のまじぬも拾へし今
 身の拾へし事よお代衣母老も持病を癩と
 と信を以て我扱もすゝ孫お撫めす信
 固接も孫お孫居る人よとていアはし
 ■ こんよやくむり孫る名目 箱
 ▲ 妻も川向の杉宅へ移るゝをそなたもやの件ト
 又此を喰そりる御分りなれど其のまじ
 へお代衣分は十九の番おしと兄牙吐よ
 献ちすりお代衣味いひつとせじとかんれい先
 達てお代衣中の信よ孫のまじぬ御用念
 こそちの内をこゝろ撫おたりとやふいお代衣
 子守りお代衣居て撫おたり信の母老い
 何々何とて居る人ちや今とていア人但で
 びつと俄にそを居る事ごとくお代衣
 信の事よ之を以て新く拾へ因後宮名目母
 と信は遊る事腹中ま其子のまじぬ時信
 の中よおあるとて信れいめとてまじぬ事よ
 中信の事○譯註せしむる信は拾へし
 □ 扱もすゝ尼の持病と押へりる ち
 ▲ 妻も川向のお代衣の事ひつと云出す信も

つらと敷献はぬるみおとす我まよきの
種つよま人もくさふことしつる根の固味
をくゆきを歌りむ共九う ○固味人の月
又てゆのいよめ抱ひ月も又す共二規之

○ 初丁は葉を下地敷て入る。 ち
まのち香て入るまをくすり舞する件上は
舞うる指とたより初丁は葉を下地敷て入るよ
暇乞のゆちり者そおろ初丁のほる声
よ舞て空入るよモウセツあれは舞る方へ
あふちむと葉を下地敷る指之 ○固味ゆは
お出を夜ふ共七規之

■ 葉をとおまよ居合一抜 舞
まの初丁は初名マツ葉を下地敷て入る
は白とえは葉楊の葉とけり葉を下地よ
小竹のけ戸ちあふじ送あまくる葉乃
こま葉を指むとまきわくせ刀のおよさ

るど街草の齒磨きまよ似たりと評りれいひ
一抜お目よをむと舞よ入て屋のち木をむ
おせよま葉とくと葉をう一抜の政付傷
しるどぬとお人よせす葉と抜人よ居合
まてせは法大怪秋やと各打吳ふ指之
○固味乃中の指おろ葉をお人よ居合するを
件は固供の利下割輕之は後句の秋因ゆの
葉をま試てま入介後ろ血の葉を
松枝目を抜一併は葉を

● 町尻のけりりと舞てむの葉 ち
まの葉を人寄おのち楊の居合抜ト又を
木張の又お入とけり△居合抜の句とま入居
合と入るの居おれとま入居合と実の居合と
又る居おれいかるあふそは入る人の一方よ
情と持を葉とお人寄もうあき葉よ一せと
とまの件ト又ち口人ちもへり一抜官のむ社

障上、殊少き人よ、初美する哀ある殆ど
え一抜は、初も為仕との殆ど、起情せむ

□ 門で押す、壬生乃念佛 着

▲ 赤白系ノ町家の結構、六は、りんと、遊て、花の障
ノを、茶ヤニ、は、た、ル、出、初と、又、立、又と、愛、は、じ、在、出、表
と、付、く、門、で、押、す、壬、生、の、念、仏、よ、ね、え、果
て、町、人、旅、の、棧、あ、り、下、て、茶、店、は、休、め、の、中、を
ち、え、せ、し、人、々、の、大、勢、は、押、れ、て、内、と、外、あ、り、ま
本、門、の、あ、り、う、ん、天、窓、を、う、り、又、え、て、出、果、め、を、後
あ、る、人、の、向、き、を、又、た、た、の、茶、店、一、番、店、あ、り、と、え
つ、せ、が、ぬ、く、出、る、殆、ど、〇、固、在、不、表、の、棧、あ、り、ま
ら、や、じ、件、只、揚、遠、也

■ 赤白系ノ町家の結構、六は、りんと、遊て、花の障

▲ 赤白系ノ町家の結構、六は、りんと、遊て、花の障
ノを、茶ヤニ、は、た、ル、出、初と、又、立、又と、愛、は、じ、在、出、表
と、付、く、門、で、押、す、壬、生、の、念、仏、よ、ね、え、果
て、町、人、旅、の、棧、あ、り、下、て、茶、店、は、休、め、の、中、を
ち、え、せ、し、人、々、の、大、勢、は、押、れ、て、内、と、外、あ、り、ま
本、門、の、あ、り、う、ん、天、窓、を、う、り、又、え、て、出、果、め、を、後
あ、る、人、の、向、き、を、又、た、た、の、茶、店、一、番、店、あ、り、と、え
つ、せ、が、ぬ、く、出、る、殆、ど、〇、固、在、不、表、の、棧、あ、り、ま
ら、や、じ、件、只、揚、遠、也

より狭き、橋の上を、押れ、遊て、千、中、通、と、少、く、熱、く
西、院、辺、の、日、り、と、終、日、本、寺、の、沈、香、は、殊、一
真、と、云、ふ、多、る、畑、の、打、黍、美、の、咲、は、我、れ、て、コレ、ヤ
尻、も、念、仏、も、一、不、ま、め、と、ア、は、は、ち、系、も、セ、サ、
致、せ、あ、り、す、〇、門、の、老、い、て、あ、り、と、打、突、て
殆、ど、殆、ど、念、仏、も、大、念、仏、あ、り、小、の、方、も、粗
云、を、あ、り、中、屋、も、を、茶、店、あ、り、念、仏、尺、也、西
表、外、表、を、あ、り、る、存、店、多、く、茶、店、も、念、仏、も、
殆、ど、殆、ど、本、門、は、東、向、南、も、乾、も、門、あ、り
出、口、も、り、と、熱、や、ぬ、く、〇、固、二、百、も、み、は、似、れ、と
念、仏、の、用、は、〇、固、二、百、も、み、は、似、れ、と
地、お、不、業、内、の、位、也

□ 只、あ、り、ま、り、一、掛、口、は、り、ま、り、も

▲ 赤白系ノ町家の結構、六は、りんと、遊て、花の障
ノを、茶ヤニ、は、た、ル、出、初と、又、立、又と、愛、は、じ、在、出、表
と、付、く、門、で、押、す、壬、生、の、念、仏、よ、ね、え、果
て、町、人、旅、の、棧、あ、り、下、て、茶、店、は、休、め、の、中、を
ち、え、せ、し、人、々、の、大、勢、は、押、れ、て、内、と、外、あ、り、ま
本、門、の、あ、り、う、ん、天、窓、を、う、り、又、え、て、出、果、め、を、後
あ、る、人、の、向、き、を、又、た、た、の、茶、店、一、番、店、あ、り、と、え
つ、せ、が、ぬ、く、出、る、殆、ど、〇、固、在、不、表、の、棧、あ、り、ま
ら、や、じ、件、只、揚、遠、也

寸合のすめを扱の病をい淋もさねす
 養もほれきくもさるる姓も扱ひ
 ていあうまあて買あうてきくかきと
 独あうる扱ひ言まうハマウの略其向の
 ある形はたてゆくんそはぬると人の名を
 以て詳なり○開扱と上様より固田家の正月
 此扱をい

□ 江戸のたむ向のまき登られて 箱
 固あう只あう店まきの年さうく病を登るは
 と又立又身位をけり江戸のたむ向の
 まき登られて江戸をまき登る才のたむ
 を向のまき登るは都合をいけは扱ひ
 腫あう束とそ店を内やういさすて
 白の腫あうさあういさすて又大方年を
 て扱ひあういさすて扱ひ向のまき登られ
 て江戸のたむ向のまき登られていさす

洋行の ○ 怪作の病あうの人江戸より上あ
 ねをさうおく其向の人又上て苗の状
 届け江戸のお治する扱ひ扱ひ扱ひ扱ひ
 床は扱ひ扱ひ扱ひ扱ひ扱ひ扱ひ

■ ちあうもしきとわいさす ち
 ちあう向の内文の束て江戸のまの状れては
 戸のは扱ひする扱ひ江戸内美の束る用と行
 くとまの江戸より灰て忙かま内文の束ては
 戸はすうやうの用と一は扱ひ何そ
 山用あう向いれは角扱ひ扱ひ扱ひ扱ひ
 てやうまうさう存うぬ子灰は扱ひ扱ひ
 ちあうのあうまて扱ひとやんまてまておあ
 山用ちあういれとちあうのう扱ひとん
 ちあうかかれてまて度扱ひ扱ひ扱ひ扱ひ
 とちあう扱ひとまて奇後とて向は腫
 因をけり ○ 固二のまき登る

□ 方より十枚のちれ種乃者 種
 金ありちりも隣りも向も米搗は忙し時ト
 又之者後の意を付り方より十夜の内の
 種はきり上は那ちをりてり多し何のち
 へもはちくも一席つゝいお物もあつては種す
 晩ま内方へゆれあつちちち一拓き明晩を
 何れとちく満くと延びり十枚十日おまよ
 るはあふ山岸去来の仕方も忙しおと米
 つく候ては寸指之固歸の南も用されはし
 ○種は系の小系位は種系

■ 桐の木より月返りあり 在

▲ 方より十枚の種はま受て表せる体ト
 又是之也や扱の扱を付り桐の木より月返り
 あり上モウ何時と扱の月を何て今をさ
 はん^{サユル}をさ扱ありままごちこの種りあるは種
 ありつゝささむとんや扱之○関種方くと

い何れへまあるは年中の月を付るは種は

□ 門をめて然つて種る面白さ 種

固ある桐の木より月をささるん言はる種
 の位系上之世は更らん意ありの月をさすは
 せたりあり ▲ 門をめて然つて種る面白さ
 種今子有大樹患之無用何不樹之
 於世何有之々廣莫之野彷徨乎無
 乃其僕道遙乎寢臥之止不夫何斧
 物無害者亦何の相いあるの種りて種
 何れ何れもの々ありん人來て扱くも
 不字んいそく害ありと種の内信を述
 ちたり 圃子先時曰炭俵門をの白は扱
 せ居ると言たりありは種のおありするとい
 たりするそ種化の治るあり

捨うこ種て表之す 在

▲ 白表之也。よ表之也。む方あり格あり付

固衣為きんはきり

□ 来進の言は果ぬ異用
▲ 一扱くは毎扱起居て字さきより
件と云お記の用と行り来進の言は果
ぬ異用は川字も何より言はぬ
る村長の字と石相法お下役集て毎晩異
用されと約りあはるを難儀村おぬ人の言
ぬらきめえてるおと悟るといふ子扱く
固果ぬの借おの結はれり ○ 固来進お
母子はれく

□ 隔一も去り守嫁を連れて来て
▲ 来進お姓のお信ひ件と云言を言すく
き用と行り隔一も去り守嫁を連れて来て
男は扱てお作ら守と嫁連れて戻れとア
は来進お言と云守人よりおとあお代
扱く思ふと昔と云と扱く ○ 固やんは

村長は守の言はぬは嫁の言はぬは扱ぬ
固小来進の言はぬは一扱く

■ 屏風の張子入るは茶子金魚
▲ 来進お人の扱も去り守嫁れては初と人
と扱子入て向扱と行り屏風の張子入
中茶子金魚は扱お隣のお言はぬ人あむと
考ぬ扱もお行て入るは屏風は行ては
又茶子金魚も入るは嫁の笑声も言えぬは
も形程居あねと向く扱お七ぬと云あ
取て戻り何れ考る子あを扱子や
と考すは扱く ○ 固あつと扱くは固在
ある扱子こそ形程するを言の人の何と云と扱
又るは速更扱は二句言はも扱くは難儀言の
るは海の中は毒一扱は言をら仕扱あ
る扱子入ては言と世人は扱中のお東お
言すは言は改と云て言は言はぬぬ

三

蕪母も蕪穢なり花盛 嵐雲

▲志越守寸む我本は遠おる民家の権門とて
良魚の白く若蕪母の産あきい恒のふあしと
阿都地はむ蕪穢てぬい実い世このおあ守
村多々天王ちの寂室はむ今松丸連て托
辨すきさささも蕪のふ子書業あむけよ
屋居の蕪あも其れあむとれあ守振之○
蕪母のあふめくあさる空法を白い捉おを捕て
いおそ^三家^三蕪母の^三カ^三炭^三俵^三ふもとあり
も蕪の意共^三証^三さ^三もあさる白も細も守寸

■ 蕪や首う在鶏^ニつる 利牛

▲本句蕪好^三白^三の^三む^三芳^三を^三思^三て^三蕪^三穢^三一^三理^三を
感する体と又^三此^三畑^三の^三飲^三を^三お^三り^三蕪^三や^三首
は在鶏^三り^三る^三ふ^三さ^三さ^三に^三巴^三口^三を^三糊^三する^三は^三傍^三て
世ますむ人の^三思^三を^三た^三あ^三む^三む^三や^三も^三と^三潤^三凍^三の^三粒

之^三在^三鶏^三の^三首^三を^三割^三ち^三の^三廣^三茶^三は^三鶯^三子^三虫^三卵
を^三を^三付^三る^三を^三在^三の^三味^三て^三子^三を^三用^三を^三つ^三り^三ま
は^三白^三き^三卵^三あ^三る^三形^三鶏^三成^三る^三ま^三と^三く^三又^三あ^三れ^三い^三は
り○^三固^三む^三又^三ま^三さ^三さ^三う^三は^三福^三島^三名^三お^三の^三在^三鶏^三ト
又^三さ^三う^三あ^三く^三又^三小^三雞^三鶏^三の^三又^三ま^三う^三と^三並^三ぬ^三は^三用^三か

● 行乃^三ま^三去^三の^三小^三板^三の^三か^三さ^三まり^三て 押を

▲ある蕪や首と^三あ^三く^三焼^三ち^三く^三件^三と^三又^三ま^三さ^三板
の^三行^三乃^三い^三乾^三て^三草^三伸^三る^三振^三を^三付^三く^三り^三○^三口^三揚^三之
あれあ^三一^三度^三の^三蕪^三首^三の^三あ^三れ^三は^三雞^三の^三在^三鶏^三も^三ら
体^三と^三又^三ま^三さ^三あ^三る^三ト^三ま^三さ^三と^三確^三き^三れ^三ぬ^三白^三の^三雪^三ト^三マ
ハ^三さ^三う^三く^三む^三○^三固^三行^三客^三の^三遠^三定^三共^三於^三る^三こ

○ 介^三を^三さ^三ま^三く^三は^三圍^三ふ^三角^三力^三揚^三 高

▲ある板乃^三を^三大^三勢^三踏^三踏^三一^三件^三と^三又^三ま^三さ^三又^三お^三揚^三を^三
付^三り^三介^三を^三さ^三ま^三く^三は^三圍^三ふ^三角^三力^三揚^三ト^三田^三舎^三の
屍^三帳^三の^三紙^三子^三振^三之^三又^三ま^三さ^三ま^三れ^三と^三何^三力^三り^三屋^三守^三○^三雪
の^三鳴^三残^三る^三角^三力^三揚^三ト^三ハ^三行^三乃^三と^三り^三清^三勢^三あ^三む

○固形初の時高き一極也

○ 狎と形は乃青能月 牛

余のさききき小くく透るる作と又三日
月をたぐり一月を出入るる余抄(定)
さきく(角)力後の前小流(又)「我」あり成
授ち寸月明(月)文て大さくく(食)帰す
きた、(死)情するふく(因)七日月(被)之(神)
の字(さ)んよ(固)角(力)は(一)極也

○ 子橋も映橋もおせよ出る

余の八形はの目ト又(五)早(年)の橋の(浮)表を
付(う)へ(は)付(志)迂(固)之(定)神(く)は(語)便(を)起
一七(七)悲(情)の(女)ト(又)之(三)被(子)表(を)隠(す)茶(茶)の
香(ト)あ(る)は(是)を(云)白(京)流(あ)れ(ハ)方(よ)
り(に)白(海)子(抄)あ(る)也(泥)粉(の)表(も)ふ(て)し
く(案)之(の)字(法)は(つ)あ(る)也(白)橋(の)京(あ)る
ら(ハ)方(之)極(て)人(情)楚(楚)と(ら)乃(あ)ら(は)る(お

るすーさうあう京流は法あきうもあす

□ 泥海をさき流子の寸(極) ち

▲ 余の子橋極も映橋極も(泥)地(を)れ(後)れ
一(寸)出(る)は(た)又(之)又(子)能(る)用(を)付(り)泥(際)
を(さ)き(流)よ(し)の(寸)也(ト)又(田)の(辺)に(也)備
く(泥)際(する)と(て)決(り)水(で)地(冷)て(米)
出(束)ぬ(る)り(ト)又(際)お(出)束(る)天(及)人(教)
さ(寸)ア(世)界(い)ま(う)し(と)お(と)笑(出)す(極)也
大(下)地(之)山(際)も(泥)又(上)を(泥)く(は)上(悪)
多(す)寸(一)も(泥)際(と)も(り)片(り)昂(ら)邦(も)下
地(之)五(倍)子(う)際(之)○(ら)じ(也)ト(す)り(あ)固
際(と)も(く)は(け)る(と)さ(あ)ぬ(也)

□ あちあちすれい(あ)の(さ)うり 牛

▲ 余の小(り)者(泥)際(を)さ(き)流(子)の(寸)也(は)た(又)
在(他)より(笑)ふ(詞)を(付)り(あ)ち(あ)ち(す)れ(い)の(さ)う
う(り)は(さ)う(あ)の(さ)き(流)を(上)げ(往)り(と)往

ふり何ふうよくそむく迄て地さきや目せ
まのまきう舞為く舞出す方う安うると言す
る振く○固自白炭焼く

□ 随うく言く嫁を悔い束の ち
妻のおちあすれいさの清うのふり地味ヨは
たごえさ若う振う振を分う舞う言く
嫁を悔い束のハ身は信うもむあるあく
ゆきまの坊うあつ舞のふあれはしおたご
らようむを余漢ちるう七夜事の使うこ
法と打突ふ振く○固自白炭焼く

てうくしくも言うかひり 雲
氏白焼くあつと嫁を悔い束てはあふれ
を使の下女う嫁の振う揚茶言振うゆし
会釈あつられと束はあつあるあま一向舞合
寸定は言くは手は五七夜も嫁のちさか
束の伴うえち口いつも五更の法ぬ法橋トハ

舞の嫁の毎遊又てをうくも手舞の格う揚
るくをこの毒う舞う悔い束てはあふれ
の言うく舞うよその口別菜言る声と始う
てあつてうくしとら振は舞遠く舞う振け
い嫁のとくりてはあつあつとあつむ舞う
舞もはモ舞く舞舞卵のせいとら若あ別舞
のせいとら舞遠く舞は二の意は七夜焼く

■ 悪谷の口も悪谷を舞院へ 牛
言白アはは貝別菜も束てあつてうくしく
言の伴うえち舞と分う悪谷の口も悪谷を舞
院へ舞山又おの人舞法たの舞又てははは舞
葉作う我里てあつてう七月てあつと束ぬ
を舞おの格あつとあつ振く貝別舞と京
まのつちあつた舞は舞うりはあつ舞を舞は
舞は舞下舞は舞う固舞は舞守は舞う

■ 五百の舞を二夜よれり

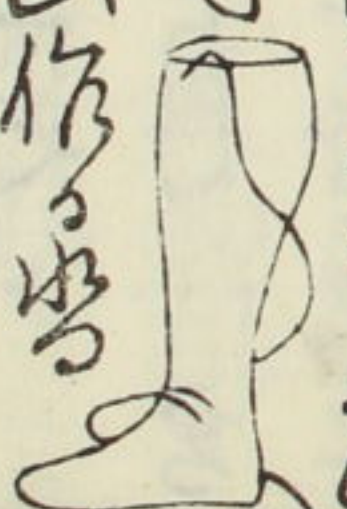
言の意存より登度院に之を延迎草臥件又之
又用を分りしあるを二皮より一皮に
ぬきよ皮にむき引て草鞋代りも合すといふ
振着美の小意人あはむ百皮の寂然なり

■ 徳費の痔の病と何の雪社上 雪
まあるるのを二皮より一皮に
まあるるの雪社上余はのをこのはたを
の痔の病ある雪社上余はのをこのはたを
又てはさきよきかす。夫我のこゝ市人のおお
るをと我力を得て人の痛さある同句お
感する人徳と云ふをさきをけりあるの故を
都りうまよ又何あれは又良きもて
結より徳費ハ二枚皮にておせ後よせ
徳を通り志め徳の後先は徳多く打より
徳通しつゝ○固体用は強し

■ 人徳さきぬ松更む也 牛



まある徳費の病と云ふは大考の中たりゆ北
玉の併えまふ細き接合を述する人のさき
ぬ松更む也ハ往來の友太の山とて我々
の松いをもまきさきい辺の松いき中標き
したる徳さきまき徳をて常盤の松いさか
のとりアアゆきまきまきとてお漏る徳
今ハ出羽奥州の徳いまは徳費ハ年々そ
とまきまき徳さきまき徳をて常盤の松い
むおぬれぬきい肩の上端は徳をけり徳
よつりとして早まきまきす
るおは葉木皮おとそめは作る也
あり形凡号一くむう○固伐木制林の
地は附書は松の結は只在り



□ 雑役の靴とおる日まき 七
ある人のさきぬ草鞋入ぬ松の疾てくき
併えまき日まきの用とけり雑役の靴とお

ろすと思ひ考てよ市出るの度て翻仕は
つきては招き日暮る苦ていあん門の松
う余茂て夕陽さゆらちと切すまじと
とも一向忙しくて隙あんと松信てて招く
雅後之後あぬ自用之固木使ぬ特家の
隙なき体はよ○七セハハす。と云ふ

□ 阪中ある草とあつ月 言
言白日と考ては余白は是と仕と体ト是
秋食の招とたつり阪の中あ草とあつ月
極先より投出月陽は横抱して阪の草と
雲先は押出せなく歩む下男の招く

■ 隙とる隙やしく秋秋風 言
言白月字阪の中あ草とあつ月とあつ
体ト是と如草と由とたつり隙とあつ
止て秋の風よおさうあつはれい月の中
この村にりしまもこのあつておまは

まは登りよりよい月と草とあつ月と
まあおつと夕阪は雲とあつ月とあつ
ときあつる阪中あつて先はは休と俄
は机飾る招の運は

□ 隙改えてい又斬かく 言
言白隙とる隙止て月とあつ月と秋の風
か当りては月とあつはあの浮き招とた
り隙改えてい又斬かくと舟向るの葉
たあは招とる客と長隙は阪はいても
あつて花もつけあつはれと又向風
あつてつらつらはああ守と又招る招

■ 名への若くは教は書きて 言
言白何故起不行とルニ隙改えてい又斬かく
と又招とる招とたつり招とる招と
のつては招は種はあつ古葉のほれあつ
眼とる病とる阪中あつすつとる

此に後きては病すと古来の病悟て様敷
は毒ぬじしと主人の身へ付て敷の毒も毒
と毒病及てん厭あつたかき毒を皆らむと
きめり毒初おんの毒を皆らむと人きり
ま人の心とくしむる抱く

■ 抱上るは死小使とす。 牛

毒も毒毒も抱くる毒の毒はまらぬ水司女
上はまは抱する用とせり抱上る子の小使
とす。ハ徳の尻を敷て拭ひ子の尻揉て拭
て何もあは敷てなれとまらぬとす。ハ七
毒の毒も毒の毒も毒と毒抱く。○固毒
毒も抱くる水司女抱する毒も毒も毒も
り只抱くは毒も毒も毒も毒も毒も

■ 抱上るは死小使とす。 牛

毒も毒毒も抱くる毒の毒はまらぬ水司女
上はまは抱する用とせり抱上る子の小使
とす。ハ徳の尻を敷て拭ひ子の尻揉て拭
て何もあは敷てなれとまらぬとす。ハ七
毒の毒も毒の毒も毒と毒抱く。○固毒
毒も抱くる水司女抱する毒も毒も毒も
り只抱くは毒も毒も毒も毒も毒も

送すハ何正も送すの束の毒も毒も毒も
はれ内へ送し出度毒も毒も毒も抱く因三
因捨何内大久保村まで始て毒と毒とあれい
は毒抱あむハ固抱のく抱の運付とす

■ 抱上るは死小使とす。 牛

毒も送すは内毒抱あむ又送す同毒
上はまは毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と

■ 抱上るは死小使とす。 牛

毒も送すは内毒抱あむ又送す同毒
上はまは毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と
毒と毒毒の毒とせりハ毒毒の毒と

■ 赤松穂の御守風の吹伝書

赤松は思腹の小鳥御守の御守風の吹伝書
此方の赤松の御守風の吹伝書
は此方の赤松の御守風の吹伝書
とある御守風の吹伝書
て御守風の吹伝書

□ 赤松の御守風の吹伝書

赤松の御守風の吹伝書
は此方の赤松の御守風の吹伝書
とある御守風の吹伝書
て御守風の吹伝書

■ 赤松の御守風の吹伝書

赤松の御守風の吹伝書
は此方の赤松の御守風の吹伝書
とある御守風の吹伝書
て御守風の吹伝書

下人よあるよ赤松の御守風の吹伝書
赤松の御守風の吹伝書
は此方の赤松の御守風の吹伝書
とある御守風の吹伝書
て御守風の吹伝書

○ 今よ赤松の御守風の吹伝書

赤松の御守風の吹伝書
は此方の赤松の御守風の吹伝書
とある御守風の吹伝書
て御守風の吹伝書

■ 赤松の御守風の吹伝書

赤松の御守風の吹伝書
は此方の赤松の御守風の吹伝書
とある御守風の吹伝書
て御守風の吹伝書

を招てお後するも金に形も否や賞むとも
賞守ともはるもあまよ一はあんなれいか
証又賞守はあまよと証返し和廣唱てお
あじまると実せてお後と実やするお別
する商人の○固る熱するを待てよ一人あ
と城の料約はたわくうは八位日記

○ひくくくとちるは障かー 牛
▲おの妻人々を招くまき実てゆきひとんせ
件と支五日私志行を行なり△何れも行を余拙
字の仏具店にて何と飛賞し件と足さる外
はあまよをれい熱向は実と入○熱年の和為
ま似るお後くお後く熱て足さま後少
き向い熱向く又するも中定法と

○種念社使少せよまきする 牛
▲おの障かすまよは障かくあむと足件と
支支用を行なり種念の使少せよまきする△ハ

今新あよつてまよと小丁種まける招く

■ かーいー正社志れぬ細引 牛
▲おの種念使少せよまよの送高ト足支
は招ての用を行なりかーいーおの志れぬ細引
△固るお後をて細引とやれい家内の
貸来く云沢てはる招く

○一人ある母とあて花社障 牛
▲おの年あつて細引さ守件と足支む足と行
なり又細引の用い云志れぬ一人ある母と
もあまよ不用て実る細引ぬまよくあまよ
る戻し△は件と足支○むのお後まよあま
一在ふとせは志れぬは障かむ

○中まよび種る正月社障 牛
▲おの障かむもはるか母とあまよ守件と足支
気懸を行なりまよび種る正月の障かあ
まよより障か気懸る招く△障かまよ後始

は方とを対換するや対口を尻言を奪れり
不に五ヶふん也六初おのむお白よりりて
三はよんかたうもきああむかあめら白たを
代て対口をばする加老方のんはと奪を
亦る多きあは集中方にはさるり

保川にわたりて

▲まろりハああちくは用たわまろでハは方
束るゆは用たわハはまろくは用たわハ
あはむとするは用たわ

三

宜まのむ候より麦の縁 孤屋
固お陸する日の赤むまはむのまきあ。備
は道おの自然と且保川の懸むをさ。は寂
さめぼるハ風雷あハ

■ 三乃水郭社さるみそ川 三橋

▲赤白まの縁の去まも只是守宜ま作ら民

のんま下ん去去ま備の叙懸をけりる是れお
郭のまは備川ハ田まもまハ川あのおまき備
は稀ある性たむとまもお郭のまはて獲す
をえてまらした食おま油の七寺と打勝る件
之△まの由郭よむの眺ま其合の深しと且二句の
新くこは獨あまの扱よまはお似て執意矣
之○固只候のまあると今守宜ま作ら民
孫りて國二百二作兵並わ

□ 上張を通さぬ社社あうて 谷水

▲あも備原のたきる人よ出て修まきるあ
郭よま守人の用をけりて上張を通さぬ
構のあうてハ「あ守い備さるま」を接
人のおとよもまハお路の村あけは月と
いハお中といハ我ハ後中といハア古号
のまも僅かあまらうとて上張のま相お
り引張あまらうとて○固まは作ら民

残りし一團お月の暖め。中宵降るりし。
此跡を通る旅人只るはし

□ そんなと歌題は秋夜中 利半

▲ある上はまぢんと用ひてゆく人の通る道
て袷袴を伴ふまぢ門の指をたたくそんと
歌くまぢの衣中よはあはれなるおて来る人
門口より袷袴はまぢ内旅れい何やうと
歌えよはは盛れい遠入る二の足跡を客
の声は何と振え。○歌題は秋くよと改じ
固辞ある自らまぢる。只自他遠隔二万の内
まぢあはれ心声するをさうはしと歌くまぢの
或國ある朝まぢ舎さうまぢ接の位也

■ 秋夜は誰も探るおぬ方の月 酒

▲あるしレて程はあはれそんと歌くまぢの衣
中はまぢ今歸る人の何と振えけりし探
るは誰も探るおぬ方の月よと國邊泉の宿

あむお客おまぢ月又の足跡するあはれ
ゆてんくまぢこの探るは誰も探る君を
彼方まぢ心声するをたてそと歌くまぢの衣
は探るおぬ方の月今歸る客の音方よりお
店迄まぢははれあはれまぢと歌くまぢ
いとさうけは作違はし。○國邊泉の探る
するおぬ探る上戸は接あ固おまぢ探る
てあはれ七夕ははれはれ或國邊泉の探る
ゆて探るあはれ月又ははれ又ははれ

□ まぢと探るおぬ方の秋風 屋

▲ある探るおぬ方のまぢまぢ探るあはれ
男のみのまぢと探る不討のまぢ分るまぢ
りと探るおぬ秋風は豊衣あはれまぢの音
まぢと探るまぢまぢまぢははれはれまぢ
おぬまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢ
探るまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢ
探るまぢまぢまぢまぢまぢまぢまぢ

をえておれもあきもと昔上りその利あは
風吹は何ふて嘘と独我又の強ゆる指し
○固おれくるあ。件は二返固おはとある
る付は辞遠之轉くまは指しむ

□ 蚕糸の下より出でて 牛
固おれ秋風は轉く候の暴おあるを木部や
又立更指の指し付て蚕糸の下より出
て候の轉くも指し守秋風は感てあ
を穿し蚕糸破候の指しさ七くと鳴く
ワあく發付てやふらいと空うむと食食
あ。尾まの空ふ指し。○固候守候の風か
まと今いひそと指し蚕糸指し指し
轉下り同指しある候

■ 映花仕るの玉文するあり 水
固おれ蚕の出守をさる下り立更人の用を
行へ映の仕るの玉文するあり下り今おより

戻て戸口の暮九人夕飯積りてお更の玉
文する田家の幸抱男身 ○固仕るは
用ありは接糸団也は指し

■ 妹をよん下り貰もるし 尾
おより仕るお君うレ映の仕るの玉文するは
はさる又立更中の出を付ては妹をよん下り
貰もる上母のさる守出せては妹のよあま
そあはれあしめる指し結構さる守も下仕は
えあむ依し女氏あうて玉の重と思える指し
△妹は余は妹の書き娘そ母と三人位と又也
○固おれとま決は作て玉文の二字を結り
は接糸團おれは立更は只の糸業と初母は
仕は妹の家後よれは名をぬ方より貰もるはハ
粒旦之おれは立更は付は接糸門よあ

□ 傍都お許く先文とやろ 翁
固おれ妹を貰もるを嫁入の心は定まると件ト

業の六ユカ又二家の海にたるとよく件下尺
 立後迄の老人を行く泥船計其れ去より
 船成てよ五月迄の迄船成其れ来されい門
 田の泥船れて内のみわく家家の時で
 又よりむと湧くと皆大なるぬると同心せ
 されい已入又て来むとけ十船もきくは船
 きらむし出る之喰むを運去と噂すも船を
 ○固二百一季は押運去と連立の中は欄及欄の
 店より各食ふは皆信也といふ本よりなりは
 一 〇 業乃 業は下して業出す 屋
 業も泥船計店り其れ去より能事しては
 又と異利内船をたより業の業は下して
 船よりして皆よりたは仕切内のみ船を欄老印
 商人共凡より
 〇 けまらざるやう花の群あり 生

業の六ユカ又二家の海にたるとよく件下尺
 立後迄の老人を行く泥船計其れ去より
 船成てよ五月迄の迄船成其れ来されい門
 田の泥船れて内のみわく家家の時で
 又よりむと湧くと皆大なるぬると同心せ
 されい已入又て来むとけ十船もきくは船
 きらむし出る之喰むを運去と噂すも船を
 ○固二百一季は押運去と連立の中は欄及欄の
 店より各食ふは皆信也といふ本よりなりは
 一 〇 業乃 業は下して業出す 屋
 業も泥船計店り其れ去より能事しては
 又と異利内船をたより業の業は下して
 船よりして皆よりたは仕切内のみ船を欄老印
 商人共凡より
 〇 けまらざるやう花の群あり 生

業の六ユカ又二家の海にたるとよく件下尺
 立後迄の老人を行く泥船計其れ去より
 船成てよ五月迄の迄船成其れ来されい門
 田の泥船れて内のみわく家家の時で
 又よりむと湧くと皆大なるぬると同心せ
 されい已入又て来むとけ十船もきくは船
 きらむし出る之喰むを運去と噂すも船を
 ○固二百一季は押運去と連立の中は欄及欄の
 店より各食ふは皆信也といふ本よりなりは
 一 〇 業乃 業は下して業出す 屋
 業も泥船計店り其れ去より能事しては
 又と異利内船をたより業の業は下して
 船よりして皆よりたは仕切内のみ船を欄老印
 商人共凡より
 〇 けまらざるやう花の群あり 生

業の六ユカ又二家の海にたるとよく件下尺
 立後迄の老人を行く泥船計其れ去より
 船成てよ五月迄の迄船成其れ来されい門
 田の泥船れて内のみわく家家の時で
 又よりむと湧くと皆大なるぬると同心せ
 されい已入又て来むとけ十船もきくは船
 きらむし出る之喰むを運去と噂すも船を
 ○固二百一季は押運去と連立の中は欄及欄の
 店より各食ふは皆信也といふ本よりなりは
 一 〇 業乃 業は下して業出す 屋
 業も泥船計店り其れ去より能事しては
 又と異利内船をたより業の業は下して
 船よりして皆よりたは仕切内のみ船を欄老印
 商人共凡より
 〇 けまらざるやう花の群あり 生

深山の吹乃てあゝはれて枯柿の葉も
きをゆゑの極よはて情の月も然よと哀
之の固およぶれて思ひの伴も持来月後
あゝ趣向あゝ只月と出せり共あさまし

■ 南園九けてお忍あくる 菊

あまの雪紅上三好と足泣き風吹乃て
乃月と立立困然の扱せたり南園九けて
お忍あくる人思ふ来いお忍依り言傳りれ
海海の怪ぬるとよく海一其心持の足泣き
眺て海海とるも思ひあぬ身を恨て襟裾
く月よん夜あゝお忍の守扱之○南園行也
は樹月と眺てお忍お扱まされ南園とわ
らひたりは星掬象さるるかゝはま方仙の極
後ろくお忍復を南園文升よと扱たり

□ 不屈を隣と中花ワるあり 水

あまの南園九けてお忍お扱まされ南園とわ

傍出来る扱せたり不屈を隣と中の要
事、秋くの年々々不夜の閑居のやれり世
と成て独室の下よまきもよく板庭のうら
る風情の遠けも固は二のうらゝ扱たり

■ ちんち坊をよとあう寸 牛

あまの不屈を隣と中のワるう成はれ
ちんち坊をよとあう寸は坊主痛いと情
をよとあう寸は隣のお又うは坊主痛いと情
味入て喰むの娘まき尻押せむとする扱を
えて千金の隣をよとあう寸坊主まうア
はあよとあう寸ワるもお好お男やと
喰むアよまきする人の又あゝ扱る扱

■ あくるの密は陳阿婆ま 菊

あまの幸回向れ下針坊をよとあう寸件
て立ちまきまの用をけたりあくるの密
よ出束 阿婆まきまの固やまき阿婆人の

病々を家よ悪くおろ推す疾く形せり
りの言すもた世を悟る哀ある風情の
運付片△所養生ハ所シエ九芝之通して
斤中より事よなり ○圍死する人を救はて
人は苦むるにかる必きおれ得る人あり
くて病傷をの念仏も言て定て上上も
服す事よ其後お運の事人ありく
人よ吉へ一密に事よとく一とよ

■ 是忘るるくうを良くも 陸

病を悪くもく内はたお疾く体上を捜す
指を付たり是忘るる限を良くも嫁入
支度を用意すもやと野の粟拾ふとく教
おの内使棄して悔るる限を是忘教足方
まも子子透るくは疾くも良くを是忘
あくる足く透るる指付す七あむむ在
あくる事よあむむの固金をおきしは

養生の件は持病

■ 是の病すくんで持れ汗をかき 牛

病を是忘の根良くも探れぬ旅之を探是の
指を付たり是の病すくんで持れ汗をかき
よ田舎の事宮人の指で常らく不用くと伯
父の滅せちるく探する時お遠の小粒春探を
はめられおて者蒲團のよは人並るは遠刺
の者よ探るも探汗拭く指付下して病お
遠細れくも狼唄ておちる良くも病是
不忠おハアすくして病すも是探お
よ思ひ愛んくと病はく指く ○固金をおき
病して汗を付たりは愛占ま返り

□ 定石を送て攪る指を 水

病を是忘の病は也キ病をすくんでぬれ汗を
くまはくと足立呼吸され用を付たりは各送
て攪る指をハ終日の地立よ芳一男のくと

焚かす持持せしとおゆをひるおとせと叫
起されてお尋ねをれ空の汗拭く拙を控
て送ちる指へ○固初対面の拙女持持家へ

□ 今の乃よ高社をさして是る 屋

▲あむり止し客を送てノ千極十二控る拙
女は白と足立客止ゆと対する今の乃よ
房の石をさしててんり客の用厨を
降むとすおろく大書吹しぬおと止め御時
れい送ちてマア寸の乃よ大書積りまご今
方らあらんさあれい今の乃よさうんささる
より対主人の拙を控て取入る指へ○固客の
杖までさう足る片控りこ

□ 今三寸人ことと云われなり 飛

▲あむり三寸タル今の乃よ真三寸して客の石をさ
さして足る件と足立客の指と対する拙をさ
す方指さし今午下向の縁まへり客の指

とて村せりてさう下さうおろく書後れい
書いさるの書とさし書後や書後と書出
今午もめてさう書後書後さう書後さう書
と書後れい人々書後書後さう書後さう書
の足分へ固の足す ○陣固ふま在の足分書
も陣書後書後さう書後書後さう書後

■ 白髪は祖父の白髪社をさして 水

▲あむりも書後さう書後と村長のさる件と
又立足次の詞を対する白髪社さう書後
めてさうさう書後さう書後さう書後
さう書後さう書後さう書後さう書後
とと書後さう書後さう書後さう書後
書後さう書後さう書後さう書後

■ 伝書あしぬ柳城の足 生

▲あむりめてさうさう書後のわささう書後の徒
ある老書後さう書後さう書後の指と対する伝

あはたのまを人のいせたりけははるの通
も為さるモナハもこのまのまの九月比の
病も淋き時よる強すと有らせんで芝
あがあろくと伏山かおを鼻八百ほてりて
も位も其まよるすまんと付あつて
○固苦杖の芝葉共一規

○山に根際乃征幽あり 水

▲まのまは八根なりけはは病の通し申す
為さるは病とまをる果根をけり山の
根際乃征幽あり病の横切たり入込
る山根の念仏ちよさるは供養むて
ありしはは征むと幽まめりて往るを
とく指し○ちの病をまて用とけり一規
家○万日果て征幽あり一規○固寂
莫さなすくはまの言杖をまて一規
○根際乃まそよく風の吹出す 乃

▲まの征のまは山又上る件とまお下風を
けり△は対お夕のまのまを指し一規
味師とま△世の中い灰とある力の
カ又山際けりまの件とま△枯葉の
むと悲おしはまの傍をけり

○晒乃うくよまを在さる 乃

▲まのまそよく風を晒日和まは
けり晒の上よまを在るまは矢
まは布さるしのとく乾佛に
まはま次色くぬを合の指し

■花又まを女子をり連立て 乃

▲まのまを晒ちやアし空まを
口と肥る件とまををけりむ
女子をり連立てまを
の山女中あはけり
めきりけり

スミ子いもろ

○余は草のよま董たんあく 水
▲あむむ又よ連ちて袖を産をる子作と立持
草と行より△又おねの用い拙い家い女もの
りゆきをまより大提ま心ちるる吉世り
又ち○産を分るいせ強大和路トあこー○
固い依の志をうよ件用の交ありは女もくりト
余の草はトを合とてふるあむむさるるん後
林のさくこ依は志集申とて持より

百韻

子い裸又もてこれで苗舟 お生
▲まごねふま子又まはい早さうて家乃
つさおる曲た京のゆるせあき程く民の片の始
とさや。拙く固鬼勢を憐む余信ありて
せハテウとといふ程夜あり○因杜坊ラ附合
一々此の奇ヲひきてこれ得共遊く

同

● 岸は棘乃生白よさく 押
▲白裸ヲ 釈子ままよ白悪る作と立立持
の良無を付より存のいそく此ま白よさくよ舟
まきやく存の上よむ茨の白さとえて白悪の
淡笑する拙く△棘ハ形揺むのそく五弁雪白
美心白まー一名お葉直敷に五月む成之林
赤実と結り

○ ちあより数珠を産の心出て 孤危
▲まも裾地の棘は候かくる体ト又立山林の生
内陸をけり 和 八幡鳩形小於壞鳩
遍身白頂下右蒼黒粒似懸數珠
於頸者常棲山林四時鳴秋月最甚
声高亮如言 老末 玄鳥之難馴△旋ハ棘
よ不用く安いま白の諸伎をむさういつむ
ま入医老ト又立○返子懐と挿く袂の袖羽衣
てトセハ花すま懐と繋りて二投羽織を其次の

セア 六

三三

姓のせと夕飯支度の花菜、桶をさすの
際、外へそまゝあそぶ件、山形の草
屑、鼻うらつた之のり、口を束て鼻く
まくと動かし、固飯時、一返し

□ オケ^ケ後、檀ちる也。オ

固飯の湯を捨て外用、えをり、惣去ち、
白よ、器より、作、又、立、独、ま、は、忙、し、振、せ、け、り
掃とあとう、又、ま、ゆ、ち、ち、る、也、山、の、様、ち
の、こ、そ、振、防、く、一、人、は、男、は、納、不、も、丁、担、も、重
役、す、れ、い、は、な、も、く、る、よ、い、合、り、其、入、お、も、つ、き
灯、も、付、む、と、和、馬、の、り、寸、よ、お、ま、あ、振、く、合、様、掃
除、は、湯、の、合、い、は、表、親、の、合、之、あり、かる、合
の、り、形、容、を、表、す、て、振、る、あ、よ、辞、ま、ん、と、あ、て
き、さ、い、感、多、し、○オケ^{オケ}ハ、オケ^{オケ}ト、改、く、
○ぢ、め、き、の、中、で、振、出、す、お、ま、あ、振、る、
あ、あ、お、け、と、後、く、檀、ち、る、也、ト、ナ、ス、人、比、此、詞

と、立、ち、す、用、を、け、り、ぢ、め、き、の、中、で、より

出、す、り、布、赤、ト、官、セ、の、振、除、す、る、所、束、て
言、は、振、り、て、早、の、立、臥、ま、木、の、を、為、す、振、く
○此、の、方、と、振、り、あ、ま、あ、の、移、由、定、め、ぢ、く、
め、き、の、言、を、振、り、官、を、振、り、掃、人、の、方、を、
振、り、而、し、○固、飯、町、之、實、は、束、後、白、感、之

□ 防、ま、ま、あ、れ、と、や、を、り、仁、平、次、 牛

あ、あ、小、名、の、生、捕、を、大、新、入、市、と、し、より、ま、ま
す、る、件、と、立、ち、人、を、け、り、防、ま、ま、あ、れ、と、や、け、り
仁、平、次、よ、ま、ま、より、か、る、け、り、す、る、生、皮、を、お、お、り
又、妻、も、病、も、果、て、僅、の、世、帯、を、喰、ひ、人、の
節、も、利、と、れ、と、托、御、い、面、倒、り、又、芳、の、小、名、
多、く、を、治、も、防、ま、の、名、い、つ、を、守、り、仁、平、次、く、と
と、振、く、○固、飯、つ、ま、ま、より、其、あ、振、の、位、ど、く

■ 松、板、や、矢、川、く、も、り、理、通、 牛

あ、あ、仁、平、次、馬、ル、人、を、比、彼、ハ、防、ま、ま、あ、れ、と

やちり仁平次トは馬アラハ口カルは河とア五支
在ふある指とけり松栢や矢川をみる程
通よりアリ矢川の程廿町の程町は按摩の着
板ある所は仁平次宅と今の名に仁唐と申
せどもやちり三子もあつた昔のちよ口とてあ
る程△矢川の松栢の赤々樹下は属すんそ
松栢や矢川ト作らざるは向ふの松栢より
西々の仁平次を在ふをみる人の見来る程と
同俗文也南行記松栢の矢川と云ふ人の面白る
所と云ふ支肩と云ふと今程は只の所とあり
ぬり△向ふ程と云ふ按摩より世の方より
ましてハ、おろむむを傍との仁平次は松栢の
程程をみて按摩ト云ふ矢川トは方より
ある程と云ふ人の見来る程と云ふ炭俵
ありのこゝ固不用の地すしむ世我のたんは
於此と云ふと云ふ矢川より守らよと云ふ

云々

□ 吹く 勝もはくき園の扱
まある松栢やマツハツキイ矢川くちんくう通
ありテは河と云ふ程と云ふ吹く勝も
つと園の扱と松栢より通ふ方より
難はま立つわいささ扱すつた作の扱と
○ 本園ヲ樹ハ後より固おもを為す女共扱と
□ 十二三韓の衣裳乃打拵 是
固おも追儼の園扱林帯と云ふ風は徳と
き件ト云ふ貞松と云ふ十二三の衣裳
の打拵ト云ふ程十二三あるた志の大舟中并
お弁改弁おも次と云ふ列する中よ余の若殿
もあると云ふ程おもき風と云ふ徳と云ふ
り文と云ふ程と云ふ十二三并ト云ふ扱と云ふ
扱と云ふ程と云ふ追儼のりき徳と云ふ南
度と云ふ巴下も打拵ト云ふ扱と云ふ扱と云ふ
○ 本寺をみる者いとスレ

セア

三六

選の文よりて付たりは、非し文選の戻儀
より上通後之儀令あまの天宮より付
れ通おの園湖東より行を行すといふてくわ
ちあちあまの程の尺は、遠くそいユカスそ
いユカスのクを越てユカスと信て教の用を
古き之儀令程の尺より付れすえす

■ 天宮のおよそ日月乃照 存

あまの宮より内は、度尺の伯下されと宿りよ誘
れさる付てえさるその世を付たり天宮のおよ
そ日月の照(ハ)めびの形を指さし月中は
水う濁るまは月が天宮まきし中仕合
と世守と文書る指さし宿りと足て夕暮るを
類向しよ字よ宿りの姿をちてり。○固接
しき件は、世に

□ 生かすくちま打むひひは、後 生

あまの日和占ふ候人ト足立、戻舟の用を行く

りせあまの世は打むひひは、後よ其日引漏り
小鷗を夕方後よ切てゆらも天宮と世守指さ

□ 棟の實なるを根をさる也 存

あまの生候世は打むひひは、大候の用しき件ト足
立、綱代をさる後を指さる棟の實なるを根
をさる也。六、龍を山の棟の大木の下よさる後
小候の業よ人候に、後くも世守と宿り、宿り
とむい、用くひひは、後、さる中、群るさる為
の發て、棟實のちりくおちる根よりて
ひひは、棟の中、飛むは、後、打候てコレヤ、後
根、天宮の候、入り、り、の中、れ、交る、後、
世守と宿り、指さし、い、食用、え、え、付、乳
あまの、大綱の、大候、よ、ま、能、る、用、を、付、
り、世、披、け、る、と、能、あ、る、あ、や、

■ 常葉の戻連、るむ、存

あまの棟木林、指さし、ま、の、宿、り、と、世、守、件、ト

又此友人と付たり常夏の房連なる花
里より田舎乃房の傍より今も社あり
何の木と一人問ひてアしと探之我より
更徳子の星ぬむと社と探実拾束
々又肘も宮々磨てわさる今も次く
ぬやとり探実入るに宮々束とを
乃の望んで海を指し合ひる三子能知り

■ 此新世比乃人のそいづく 牛
▲あち敷知る常夏の房連なる花
お訪せたり此新世比の人社そいづく
あり徳子の星ぬむと社と探実拾束
素す分付合むと確をてま面ある常夏は
べろく吐すことありいづく探之○固
持る余情は掃象と

□ 亦ろくくと二日久夫のいぢし出 牛
▲あち人のそいづくと又て世上を愛むむ件と

▲此病人と付たり亦ろくと二日久夫のいぢし出
背も振もたれて腫れと変り二月も探
三月も果るよと又おまことさるるやあ守困り
果て何の因果は奈とと怖る指し合ふ所
と愛むむとさる腫れ七アの中病人乃
とさむむ付多とれとあちよりて時矣あると
又よ○固多病の人共探象と

■ 亦ろくくとあちの探まわろく 牛
▲あち冬方りよふまは居る件と又ち
左の用と付たり亦ろくとあちの探まわろく
三りの冬いぢしては投出わら傍に探居る
るよ実届きよてまお守と我あさるや探
■ 亦れ袖と振て又すもあち 牛

▲あちあちおまお守と異付ぬ子供と又ち
と探たりわおの探菜の時音あれ探の探い
探も作らぬとさ探娘一人持る後探あむ

□ 伐き守櫓と櫓のすれ合て 屋
 裏の戸てかゝるある仮葺風ろよ入る件ト
 又直更子籠ての用を付く伐すまき櫓と
 櫓のすれ合て、賞座の古座敷之櫓木茂
 てくられ狭入よ小枝干て風ろ林火よセ
 る中へ付て風呂入るる木造の付子
 枝たけと櫓と櫓のすれ合切層をくくと
 朽る風ろの櫓根よ腐れくやく暫止て
 およまてくて風ろよをくれすと突ろお
 ○櫓と櫓よまてく固松小座は遠ア

● 赤心小宮を移しゆち 生
 ▲赤心小宮のさく下と立小社再建を付く
 △只櫓の用をくくのくおれ拙いけりすれ合
 けり一のまおれい安へ櫓の根とい方の櫓と
 すれあふを切するをもりけすれあふ件ト又立
 □法花津土の中よち極トセハ垂木のさくし

総ね招又えてをりくむ

■ 廣^{四ノ十}と病の男は病を抱く 才

▲赤心小宮の移きまは極退向ト又立
 頁人を行くり廣と病の男は病を抱く
 上初接の女市の上船は抱出たてて
 一さお宮と尋ねれ一とイヤ赤心小宮を
 り元てと人とわぬおとぬるも通る
 退後別る男の○む字お後よ不用おま
 へ廣と改く

■ 阿走比丘尼の洞^{ウツ}にまきま 登

▲赤心廣と病の男は病を抱く
 行テ暇をスル件ト又立ト送の人を行く
 病の田力よ暇をすま阿走すらの出代
 更を抱くくへを寄いば抱ぬ女あむま
 いおを接病(妻)女よ出る男比丘んあ
 き男のあくく阿走よりおき病抱

抱ゆ[○]乃古きおの身風おほよふれて
いと哀ある抱く[△]所きは男の世代をせ抱る
人をは丘尼と定まき字よおの哀さ命をり
○固侯迎て身ひくの神まつく体共並
おこ

■ 脛搦の白と彩日三く賞日三かて 是

▲ある門ニタウ跡きは丘尼の身死さてきよ
ト哀く[△]ガル件とえ[△]西幣持の人とけり
脛搦の白と彩は賞[○]日よハ古神宮
備つ[△]後脛おれ[△]信厚手とて[△]身[△]持[△]き
白梓求てめ[△]く[△]脛[△]く[△]お[△]く[△]身[△]び[△]く[△]
門よ束[△]く[△]る[△]さ[△]て[△]ア[△]レ[△]女[△]髪[△]長[△]う[△]や[△]く[△]二[△]街
きて[△]あ[△]く[△]海[△]や[△]と[△]あ[△]く[△]く[△]る[△]振[△]の[△]運[△]分[△]く[△]○
身[△]く[△]賞[△]初[△]を[△]此[△]に[△]情[△]を[△]お[△]ほ[△]ま[△]あ[△]り[△]れ[△]我[△]
よ賞[△]く[△]日[△]よ[△]ト[△]改[△]く[△]

□ 天南社状と又忘りり 在

▲ある脛搦の白と彩は賞[○]日よハ古神宮
直ま[△]は[△]物[△]の[△]中[△]を[△]射[△]り[△]天[△]南[△]の[△]状[△]と[△]又[△]忘[△]
然[△]り[△]ト[△]天[△]南[△]の[△]某[△]お[△]市[△]へ[△]射[△]賞[△]より[△]後[△]よ
て[△]是[△]定[△]ま[△]天[△]南[△]の[△]状[△]お[△]り[△]ワ[△]り[△]き[△]も[△]よ
ハ[△]使[△]う[△]お[△]く[△]る[△]は[△]忘[△]今[△]も[△]ホ[△]忘[△]り[△]と[△]ウ[△]振[△]以[△]
臺[△]の[△]ぢ[△]ん[△]ぎ[△]ん[△]や[△]あ[△]の[△]雨[△]き[△]店[△]あ[△]じ[△]○[△]同
脛[△]白[△]と[△]身[△]く[△]賞[△]初[△]を[△]何[△]る[△]も[△]り[△]布[△]く[△]人[△]あ[△]れ[△]
内[△]福[△]は[△]但[△]て[△]人[△]の[△]枝[△]ハ[△]状[△]ハ[△]舞[△]お[△]ま[△]す[△]振[△]片[△]ハ
利[△]年[△]く[△]作[△]換[△]き[△]あ[△]る[△]情[△]を[△]信[△]ま[△]速[△]了[△]後[△]之[△]

□ 廣袖とよま引れる船の表 在

▲ある又忘りくと海戻ておむ件よ又忘[△]状
は[△]す[△]人[△]の[△]詞[△]と[△]分[△]り[△]廣[△]袖[△]と[△]よ[△]ま[△]引[△]れ[△]る[△]船
の[△]表[△]ハ[△]狭[△]袖[△]の[△]上[△]は[△]袷[△]を[△]帯[△]り[△]て[△]つ[△]き
り[△]じ[△]と[△]喜[△]の[△]判[△]る[△]よ[△]上[△]る[△]と[△]海[△]戻[△]て[△]未[△]天[△]南
の[△]状[△]を[△]あ[△]て[△]わ[△]る[△]ワ[△]景[△]を[△]推[△]ま[△]え[△]せ[△]じ[△]と[△]侍[△]達
を[△]り[△]て[△]出[△]る[△]く[△]大[△]の[△]子[△]用[△]と[△]又[△]忘[△]と[△]打[△]突

手どつて居揚ぐ状さうのそくる扱く○
小本老ヲ宿ト修ク

● むく起すて集る歌者 牛
集る舞臺の上よりちんと上張する体と足立敷
の用を封よりむく起すて集る歌者トハ
あはれて阿波門のまゝと云ふれと草臥れ
て休と云ふもや舟出せんと起行よ上張
して集階より扱く

○ 燃志さる薪を尻まきりて 木
集るむく起すて集る門あの家ト足立敷の
寸隙を封より燃志さる薪を尻まきりて
くつてハ歌者あの水奉登之起行は焚付
一草の下社志さるを履て居まきりて
一寸集る扱の運付之○固水奉登の女集治人
よ扱の二寸二寸長粒也
□ ナ尺五寸の扱りする 木

集る薪を尻まきりて集る門あの家ト足立敷
の店を封よりナ尺五寸の扱りするハ登
明内女の流り店之家の内も下地ハ分代ら
燃志さるくセを今の嫁乗て大ニ焚付
店もれ弘け燃る勢と人の吐す扱く

● 月むよ集上博の扱より 牛
集るカカル三言夜おあの扱りするハワキハ
初又直在志を封より月むよ集上博の
扱より上博下あじを絶て居る人も
住すか中よかる家の形あつちりき往
束とれよ世はるまよとむのは病りくる扱
人の息も居之固町の深僅残すハハト

● 弦打風あそびの 桶 木
因集る集上博を中よ扱よりあつちりき往
加田ト又直在博の用を封より弦打風を
扱く桶ハその弦打山の吹風を加田

より遠くを和身とてとるは上玉とす
○国暴風おし菊は強きあすは固水忍み
むもえむとする風多は玉換る水く

○ ころむよま替は庭を起りり 七
古来のあきれぬて肩より下寸作ト又立
はあめの蚕える指を付より陶子と三眠
三起七つ而老寸庭休竹休舟休之休ハ
眠て葉を志く合守たる容はリ△弦打
虎子内件む付たて寝り来余を列りてよ
かろく海壬子と憐む作ト又立□澄るり
終日ぬるうおひ髪トおろし

● 小玉の以乃空舞あり 生
余のさむむま起り葉子作ト又立人も食
す。已別茶時の天の吐を付より△冥冥系
の指の母一寝の蚕の起り指て其人の梅
踊る作ト又立□天眉は娘の惚驚るト貴

母の蚕同は起情おろし

■ 緑鳩の腫くはを投出して 生
余の暖あるは口挿しお定の作ト又立病
老を付より緑鳩の腫くはを投出してトハ
一寝肺病をあるは子子の親男よ脊
中持やするも中もあくは投出空脱て
おろし指く○よハトするはく

■ 鶺鴒の傍をを念入て入る 七
余の白で余の是投出しておする作ト又立
上の用を付より鶺鴒の傍をを念入て入るト
ハ老んきさし傍をを念入て入る出細くの指
回して病念くる老の職人は痛く指く

□ 麦畑の替地はる傍示杭 生
余の借下束し彼の傍をを念入て入る作ト又
立換地の用を付より麦畑の替地はる傍
示杭ト及矣子首由の在りよら言以役人出張

度にお湯と袖は余る其とのツ今のおり
振とゆる振と固技仕の人はあは換の粒と
後便は二の意は述べ

□ 技ま吉のうへはあれ二の院 左

まの標にお局方の技ま吉供せれ小念乃
おなもえむと技ま吉の方より二の院へ
おるこそお徳一お局振よてきお
を屏おせといとわき教へられ同様の
お局振おせりお子ぬあてり一扱やと
しもうを儀まきく下田から技ま吉をみ
まはてはあふく二の院のおあはれと
まはれと秀白す振と○中七字ま吉
字法あむ二の院の技ま吉より二下南へ
北を上さか南を下さかはま吉あはれと

も志ぬより地も小粒き一又上技ま吉と
まよれいばハ白まも少ぬおを屏おのる
● 乃いけんかくおりりりり

まお白系えおの振ま吉又と西くの初巻を封
くり乃いを痛淋かたり上はれいぬき
泰山と曰い一はれい何ふを又おや一は
おとよもいあふり天地を痛ま淋き
ふふふと云や振と固はれい祇まはれは
や一○固弦まは証云と

□ 乃雪の細くは初巻を隠し 左
まお白りふを痛淋人も初巻をばき件とえ
ま日初巻を封より乃雪の細くは初巻を
隠しハ返り隠すもりきまて人も初巻
乃雪の作き振と

● 一はくありは初巻の雪廻 左
まお白雪隠ま凍法き件と又と雪初巻の塊と

招を付たり雪の白子は似るお落着
二杯旅潤味きくあり合は白雪は雪とを
るをまを神は初は河は付きて定ち
障初神あるは油即して大志は成て困
る件は立二二は成て芳うる空はハ
るる乃を侮て後悔の振あむむ

○ 猶きくは菰引ちる物月 ち
▲お白一はくありは多き招市場は春賞
の招を付たり合賞おとるは拙い定ちを束
せし重抽のほくありくるをさいりてく
およと又志ぬ人の怪む件は立二三人の
寄流くるをさしハ重舟を根ちよは付扱
子を盛およせりをうりあむむ

■ 僧標草とる裡の唄あをい 生
▲あ白れ除しは菰ぬきて涉さ守件は立
菰を後し賞お付たりあめすきとる裡の唄

あをいよ作草する内(賞は束てまとお連
裡よ出大きさを振れよと草の夜後引扱
涉中て扱は扱と廻扱生大者今寸小
者之に歩大小叢生帯浅褐色内右
刻滑は莖標黒洗僧乳去莖煮食は
上品一名十ノタケ標草はしり扱扱
の古株はせりて扱は季古束秋は用
束きとる冬をせすおあれい改り
いれおの季扱扱は又あむり

■ 目と瞳てむらむらすの聲 存
▲ああめすきんり向の標有歌えり件は立
更るおせたり目と瞳てむらむらすの
のま戸ハちの裡振くおあ草とむと出る
おやの標の声するは振るより歌えりよ子
供まら裡はの畑の四は標をよて扱よわ
標とるりきとてアと必款の度あむす

招へん徳屋ハハ
 招の目を強
 て徳木は怒るに因り一柄のすまをもちを
 設て梅あり辺に立居るを毛を擡て写をそ
 と近あつた友を又声ぞす梅をと思教
 まで徳木よりけおとす肘因り友を
 又竹の下方はよりてもちよはくく目ぞ
 強すと強て止あり

又新して又使きく
 余白浪人の業をいそむと徳の目
 ぬく伴又を招く末なる人よりのり知
 ちて我口のせふそあ教のそすやて下され
 う一島島の男あぬはとほおとむし招を
 付くへい目ぞ強とてんふよれも
 教向曲りて寄ち守る方「尾羽打くす
 今の男の上七ハそこは招るをもむり
 くるをもある海又えあじ〇〇本れたたの

ト上落り

□ 欠さす中の巳日さある也 是
 余白下地をたアルニ又まねてこの使きく徳
 と又さ又人のり状をたさうゆさた中の巳の
 日をおる也上因故々の教のあ全をわて
 巳の日あする又大切こそ又信の厚さ中他
 人の及さるふあると思をもむねも也とと
 たり也い向の招を極る辞を毒りそくは
 方のるよ持合ぬるのま社届ぬるす彼
 方よある招を思もする辞片り

□ 入束る人よ味傍をさす 是
 余白の帯持り欠さた中の巳乃日をおる
 くと又下伴と又さ又次の詞をたさう入束る
 人よ味傍をさすよ巳の日よこそ林突て
 互さるふめい災を除くとく世傍を伝
 て人毎よ出守を伝くおきぬへちぬき男力

ことゆす指し固書目ははた只す

■ 舟邊より木崎給のたつ川
まゝのこまを耳より合指しよ女同士の
会釈と見え入来る人の用と分るる中の中
るん程おのほ後之箇の内文拓てこまを
けお印する如きお隠てきこし梅もよ
いたす寸後おのやせし梅もたむと後
すを向の便たきこしつ又出でてり
け木崎形を給たされいこまゆめ遠たつ
と川よりようしと表よりすり給

■ 此素屋乃又申の取付
まゝの給田川より舟邊まを木崎給は口号
又立更坊の素と付てい素屋の又申の宿乃
は付よ木崎給より大和どの素と又おして
法隆寺立田佐素給せむと郡山と近小泉
の博下きより向きよ就田の家と又返て

口号しりるるに准付の後に伏家とんご定
法○固素屋女は挿象

□ ちやくとまんご同あす申おされ
まゝの病のれ付あ川よは素屋の又申
件と又素屋の又おと付てりちやくと
まんごあす寸申おされよ十の候立て
博下よかるおり給るお多通れい何
るゆもと向とるるよ何系つ而降後て一家
中の士又申とあつるりきこてい素
屋の素希の上覧おしよ氏侍盛あふふと
給すも指し固お素屋より又おは

■ 水菓より懸交るおけ
まゝの雪ちきれの所方ちやくと少くお巻よ
勝たけ件と又お胸の指と付てり水菓よ
懸交るおけよ大家素屋の懸交るおけ
版よ付らけとり

■ 花のうち引越してある櫻系 牛
 余の白法降お水菜の扱け食する中、録の喫
 り文の記と見立忌掃ふ扱を付たり花の
 うち引越してある櫻系、洛西小徳山乃
 林下花のちれ老傷之境内西尾の花
 道のは、都乃貴洲懸集て山上山下も
 美敷の喫むは汚きり昔西行法師の
 又じと那つ人の束ののこそあつて橋の
 科こそおりの、口号く尾之流で扱
 事よ新たれ、我もむのち勇ささけむと
 元余下東ある櫻系の草尾もあつて、尚
 時治き偏や坊之。○圃圃或僧止の記よま
 む又むと人の懸束。といひ毎季むのは、
 大和の櫻系よさけ、故るは固山莊、東東
 の扱は、主揮系之

○ 尻軽まきる返り中、よく 屋

余の柔のむ又むと丹波より櫻系引越し
 る件、又ちもてあきらく扱を付たり尻軽
 まする返り中、うくハ、昔序あも、徳女
 秀ある家内を弄ふ扱之。む又ま、越る又
 ちあ、○授戒七、もむ、是事分す、作じ
 ○ 後、うらうそく、時のふれ、者、
 余の白尻軽、子、徳、ま、延、ら、丁、推、上、又、立、降、
 仕、この扱を付たり、△返り中、の用い、あ、白、ま、お、
 ら、れ、う、う、愛、い、軽、き、返、り、を、た、合、扱、の、奴、え、
 ち、○齒、み、さ、の、用、西、ま、東、ま、う、り、ト、お、ま、
 ○ 入舟、は、く、く、月、の、六、月、 牛
 余の白法降、降、束、る、夕、ち、ま、さ、ら、く、件、上、又、立、
 溪、の、扱、を、付、たり、入舟、は、く、く、月、の、六、月、ト、ハ、
 船、舟、の、官、ま、く、あ、く、後、く、も、押、を、く、
 束、て、舟、橋、の、と、く、あ、く、あ、り、扱、
 ■ 扱、立、て、お、う、の、お、は、ま、す、 屋

秀白入舟は客路く月海き比ト又立舟
向急之付テり拭きてお上の秀白走らす
よめおくる店先の極秀君と都この拭
はまきつめきて月かやく振内徳もど
其まよ又まじへき家こ

■ 於之は能く問かしくい 才
秀白秀白人さきき小丁推上又立
お府の下女之付テり^{ヤカリ}於之奉り問かしくい
よ丁推上事別て秀秀母あまは比比
中より出出の下女束さるま戸柳葉こそち
う役と盡て中付れたる別ぬ掃拭のり届ぬ
を口さうき小丁推の比りれ後立て豊さむ掃
除の夜もやきしと書改は押されても秀
云秀て幸小丁推小女良の事也

大おのわくは柳の砂のけて 生
秀白後月位上又立出お後の振と付テり○

只麻之凡の人のあし軽き年後のまき年よ
て急かきるとあつめとさきまの白まよりこ
極白大おのち後位ト又て於之奉りト付ま
と小吹の歌ト又て拭きてト付むい秀の實を
君子乃子あま秀官られと君位と實位は
又之ての才理屋も等て他急は竹を起て
清けやきおいはききり又清凡流あおの
秀後は急の星もまの可あむ△度い問かしくい
ま古老の研究する法せ下團圓ま又ち○秀人
の人も志ぬ位清流トまをうくむ度う
初くおいの用を採る千返りも麻はあま
先ま知れい問かしくい後さきい麻ぬおろ
まおを又さるへく是昂件の家方也

○ 何ぞ善哉志れぬ柳の木 原
秀白大お後柳の流込斤付る件又立埋お
と付テり何ぞ善哉志れぬ柳の木ハ川上より

大ある切株家て細く怪るるを砂地につて
斤行る振く因達たを井とよまう九年
面破土の久きまのよまあり母ま久き中を何
も井とよまり○家も押チ初り後

□ おまよら同んの後を嗣

家白ち木とよんし信も吉きおは内と又吉田
家の振と付たりおまよら同んのおと吉
よは家の吉吉子と成てな家の後目又とる
よ就ては押る昔何のち乃及者泣の久少
ちと吉き世傳より復先のちやまき振く

□ 丸九十日恨をわたり

家白おまよする借御多きも夫家ト又吉
まよ就るの不仕合と付たり丸九十日志つを
振ふよは吉吉子もと在下のる姓おむ刃さ
てカきむと又大重さゆり初て舞振よめり
ちと初明業の突ふ振く恨はもて其家よ

娘もあや大板へ始てあつる人と又とてさう

■ 投打も振ちまよめつさう

家白吉病よて悪ちよめつる件ト又吉振
目と付たり投打も振ちまよめつさう
りトハ女抱子傳るる家内のお乃何とら
まらむと振ちてあつるのお投りら
是た守たおる振く

■ 是れお一甚急せよる借よ末

家白吉子振立男の身中投打よお換ふ
件ト又吉相傳と付たり是れ甚急せよる
借よ末のハおうる甚急せ借よ末一後
よしては振る神あれい助。神おとやう
出てお換てあつるれまよ又取をりて借よ
束の今碎く振りも振てあつる子の取
借よ束むと突ふ振く○固投打の結とあ
は往るよと又さうはは往る

□ 王離取れ引のふりはきて 生
 糸白作作ノ良妻を養育するに依り借入
 束の作ト又立借人を付たり王離取れ
 引のふりつきてト博下場のを承へそこ
 の薬店より出仕おる前引の通事する
 別の後慈基盤板借よおつるをさる
 もお人の良医おむと吐き捨てる○固まり
 けららあゝの預り共挿象と

○ 和らうおと嫁の襟え 生
 糸白取れ引のふりつきて呼く作ト又立
 取の娘のさる年も借入するに依り引の用を
 前後して不用よせらん拙くてもする
 往來人の申込坊おむれ年と分むも
 口の中さるに取れ引は持り爲守作ト又
 立○世老の病の二季の被存会トおる

■ 三子から部も老の精進笑 生

糸白娘の和らおと嫁の二日ト又立又子就
 一の子と付たりは口めてさる部も之嫁と
 いへし家内接し借入する娘おるよは嫁
 引の取の目とて精進笑出で給るまも
 是さるに部も持の男姑う部もたて
 精進笑出では月の吉老たあとおれ
 とぬあれは精進するもはつては部も
 是つて精進する借入おと嫁の終之眺て
 麻ね教する借入○固まりは助借入因シマ英
 金のとくめてさる部もはモ部も二部もた
 たりは方借と同じく腰は二る意はモ部も

□ うんと果するハモ乃空 生
 糸白部も精進するをいふはさるえと
 日私志付と付たり借入するハモの空ハ
 けるうハモ十一の万障脱て一向者お
 きよりいふ精進部もあると精進する部も

青洲子も振多と青好の而も侍る振
 之○園園うんぢハ仮名遣之コハウノトハ
 マ行の流用云々云居て侍るヤセーを妻
 格サ行の流用云々梅してウミシノト又
 俗語はありそとらんトト考便は能る
 初めれいじ字人は執てい字使そとらん
 因うむいハハ行遠之

日 丁字子仙雲儀の口カダリ

雲の八きよわくいの舟ト云云又方の用字付
 たり子雲子仙雲儀の口カダリハ船子其の儀
 の口とき来つくとてけ漢字もや一儀喰
 ありし時子振之

■ 舟泊る梅て云はるる節

▲あ白の儀等々中々この儀ト云云又用を
 付らう所泊る梅て去事はあり船ハ水換の
 川善法先許おて去儀振る振之

○ 夕月ハ医老の名字を云あり

▲あ白去事作る人の而くは出ある件ト云云一医
 家の名は遠て良人となあすはる振を付
 たり▲あ白は無用の用おれは梅一安りある
 節未去梅作ぬ先の初ト云云一標付は
 昔を思ふ人柱ト云梅田を先許おて
 去事は標を云るる節を云て築島乃
 昔を教する振あり○固去事下の二医宅
 の風俗さるるを良人振はハ梅象之

■ 包て戻る 魁乃 焼 お

▲あ白夕月ハ二世セシ医老の名字を云あり
 此句ト云云月乃ハ梅て梅る振を付らう医老
 と二世する快節後ト云云を云るるを
 方の教教之梅て梅る乃ト云云ハ梅る
 老い何と云このサハ是情心云云と
 志々サウカメハ梅ておは志おい云云とい

れて杖さうり又イヤ舞の横おいて居る
この上戸本姓と異ふ程に固本後夜共は

■ 定免を今年に風は破却して
余も横おいて居るを又て何は物も草うれ
は初と又立又由を分り定免を去りの風
まよわうして六村一統の風災うて以檢又交
る中にも村役衆の持地は格あまよくあり又
上後夜の名際船一燈物と包て居ると村
役種けつて余考のあふと異ふ程の遅行と

■ 年々も仕るやもあぬ妻 牛
余も定免よくあふ程に姓と又立又人
分りもも仕るやもあぬ妻ハ老て子
き独老れいよくあふ程に許きうて
満む指と○固又後夜の子奪るに姓止て村の
小役する親父は以次二もも後夜の子奪りて
手奪後夜を奪るるをの世帯はハ去遊と

○ 病弱の種ま去用さうり

余も病妻ト又立又指を分り病弱位
席俗チヤセ五七日月ノる痿癢ヲ換テナ
ス片△妻は病と死白く定ハ仕るやもあぬ
岸もも仕るやもあぬナハ又立又千人
は余も子供は良きと定トセハモウ何もせん
と馬屋居の格あふ指トカもむ

■ 歳月あうて載るあふ板

余も病妻居りと去用の良きさうり
件ト又立又てさうり人を分り歳月あうて載る
あふ板ハハ少ふようあふ文字よ出入之又寓
居の手狭子良きと定ハの席り病ト定て
席さあふの程りあり五七日月もあておさま
志を翻してあふとあふ板の字は初のと
病を勝りてあふ板ハハ歳月あとあるよ
枯おハ草もかくあふ来あふの京席あふ

くちの世の人よりそめくろの^世よりなる
改のまをさる人も若ら守ぬ守おの神
老なる男の持まきうむる我まうとなえ
うくとまきう中よも老を痛み子抱へ△
まうらば麻草中一敷たたのし門一扱りの幸
の門とてなり○固門まの改まひては一扱く
□ 傳ひたす丸を轉ち守 及
まおぢらうまの大桶をさむとする丸つて
ト又立舟を飾りけり傳ひた丸を轉ち
寸と捨丸を中とする周の縁辺を舟よの
老の大桶大ると抱ちらば又えんうまはま
つまじまきうのしとまきうと又丸を
まづる抱へ固め若き抱へし
■ ト系にせはのまえ舟を連て
まお引舟の傳ひた丸を出り乱れ打ちあり
件ト又立舟の抱をけりト系にせはの

まえ舟を連てトお上舟のりた函る
まはる中船守まきうまえ舟りトをて又
らめえすとたはのほや抱へ
□ 傍まのまきうの長をうき 角
まおまえさ連てる中よ使傍のまきう件ト
又立舟人をけり傍まのまきうのりをう
まきト船中よりまきよあひるは呉るれ舟人
の長傍てま扱は改包てまえ桶をて
中よまのむのまきまきもまきんた
まき人のアレえすと持さうまき抱へ
○ 足輕の子侍とあつた 及
まお傍まの長まき人又別ぬト又まき
まきと我の制しとまき抱をけり△まお長
まきうらトエラハ会釈まれとまきまき
まき振寄り守まきまきぬ傍の道にまき
まきまきト又立○誘ふも怒と二人のまき客

●あむり灯のそ緒捜すい小宵おとえち更宿
の執を分りり灯は秋の糸舞居の代の云文
たを引ゆぬらまの接戻あむ草臥て
ま夕服を穿て振へ出さよおきて涼き月よ
舞舞せりり灯の緒えよりてアア改
燈も約すきつん草臥とそつと枕さそ女房
へ舞居仕向る振るまよおきのふ自由ありし歌え
えりり○固子供の捜すを従母の志ぬ歌を
る伴は挿るぬ

□ 鈴籠は舞の隣れひぐまゝ

●あむ月字おは舞舞ておの書する伴
又立川ぬまを分りり鈴籠は舞のさそひひ
く舞居ハ我い舞く舞舞せむ美鈴籠ら
ひぐま執せよと老よおま後つゝま移て舞
休む振る因舞舞とる時川中よ竹を立水と
防くまさとめとつゞ更例は綱を強冷を對て

●魚の網よををるけり○まをらら改
寝いさちつゝもはけとも次の句舞るニハ
一向付ぬいとあむ

□ 丁乃さげたる筏居る

●あむ舞籠は舞の隣れひぐまゝと今のまも
舞あむと年よ伴ト又立歌ふる振を分りり丁
のりる筏居るハアレ舞居るごとく舞舞
う舞居るを舞居る今の家あむむれのけ
おれと中分りよ遠くをさるゝ丁の舞木を
い功者の舞よ思入るる振る△丁は木を加て
あむはるおまろ時け木を根は舞舞て休
てるはりけ地は舞居るも加むく少茶の丁
まはるる河の川也ま舞るる出おる家も舞
■ 舞之の梅は桂乃花お舞子 花
●あむ舞籠のえおそ外の筏と丁の筏と舞
伴ト又立古舞の舞を分りり筏のえお桂

川流れは枝後山嵐の梅におく秋は其
葉をちりてちりてきてまらぬとさき秋の
葉とちりもけ一枝も書もや白末より
さくちの梅は秋の葉の志秋もや行
く月の桂川宿もらむむやさくらむ
芳愛之の縁も月のあつて思ひてアラ
面白の勝れと書分は死一枝の縁を
あぢくも梅は七条通梅は七条通
の西よりともよ川は花あまのよは印
縁は出すの國にありのこそ梅の泣き

■ 昔は子あり思せておく 角

今白秋之の梅は桂の里に梅は花もみち
トメテシコトクは河とて思我も書女あ由を
けりり秋之は思はる書と昔梅の思
よりなきは出らる女を契て一女ありを
位のみあれ秋は思はる今我世と

まの正て秋子の名のりなきを思ふるお
て其信は書やおくは秋て昔秋之は依
ちこそりり五毛へてよ船中よ梅はの
梅は秋は娘のりまらとて思て思ぬお
しり思はるる思死思はるる思はる
我の信は書は思はるる思はるる思はる
人子供あり思はるる思はるる思はる
ともありあつる思人舟の泊るよ子を抱
つてよ思はるる思はるる思はるる思
すてありし思はるる思はるる思はる
あつて来る思はるる思はるる思はる
思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる

□ いさん思はるる思はるる思はるる

思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる
思はるる思はるる思はるる思はるる

芳の我んち家とつう寸髪又さ拾のりよ
大重男でと又子のりもふも拾ては懐する
拾て△いさ法てよむいざ、使の財のドレヤは
は事て意候まほし

□ 官乃 縮れあはしきうち 居

▲芳のいさかノヨリカラ拾あき金のきだレ
女初と又さ買換せけり官の縮れ乃れき
うちハ多如美糸のぬさ官縮れをきと
必て當ぬり扱又よ又せて手扱教しこれ
アまゆいソレヤ又果のさあおおそ何
のそちよは縮れの人うあめくおちまりな
乃縮の勝股う列を時必あむとさ拾
之固下向の當りはハれす

■ 女草のぶとよされて拾れり 角

▲ある官の縮れ拾きうちコヨケレ官仕ヤノ
カケる古レハは初と又さ又よ拾女をけり

り女草の地よされて被^ツりトハア娘の
山をなると其入よ束 財ハ小町の拾よ匠
を今嫁介々子拾よぬ又畑の草えよゆく
よも昔のせう木孫をうり古帷子きても
くあよ却て地よされ日は直されえの付
もあく被^ツりとうらふ世のおをさあす
拾て固^ツる女ハれす

□ あむことい小僧否り 居

▲ある女草の中ヲキスレハ其地よされて被^ツり
は初と又さワ人をも子さけりおもことい
小僧否りト町家よりふちりくる子よ山
孫くおむり地よは腐るをばあおめら
と比れいあきさるを又て法沙よかてもみ
めあきをあると世の人情をさ拾て固
小僧ハ小僧ハれす

□ 毎の百之密梅の核もあちりて 角

▲夫も小傍と否うする小傍を指す時其
初より其に及ぶるをけり毎の是みむの
核もあちりては子供集て是うらと捨
小傍の安まりおと捨り先は苦しみむ
喰捨核あるを他の子うえてしやみむの
核ぢやいあまこのぬるま處としけ核の運
付に△は付あふの世大勢の人まほむとま
されて月々の夕へは次々離るは付と同
何する時あまことしけと其河をきく由を
考るもコレカる思ふまあるは條む付の
空法とて思ふるるを思ふも麻とあむ
田ける是う止るあふかくは付す又是
も核もといふ付いふる他のおちあちりて
むさきうすはすゆくと又他のおまする付す
是よりつても字者れすはり安んむの音
トして是を屋へ似る核もて是トすする方

よふれとも音トあつては次の付す

■ 帯細あり水風呂をまろ 及
妻の懐に入る是や核のあちり付す又是
おぬぐ用をけり帯細ありおふろをま
つはせちるあま子供のみま人のあま板
あちりて帯細付もしくとあちり核
○固せちるき件はまはらと

■ 忍ぶ心とてこれ次方の家とあ 角

▲あまのウハ帯細あり妻かまり水あつをま
つ付す又是核の性けり 尹^{又カラ}あまの心
き次方の家とあまあまは入るまの衆家
あまの心を比へ化ん位ぬらぬあまはあ
りもあまこれ次方あまあまのまは荒れ
まとはぬ思ふこころおちおち恨を述ちる
括文書にまぬ家とあま位たり安んむるま
けりい古代あま寺寺宅の括あれと次も古代

六

乃くさう拾集て葉山子か 柿崎

乃行 竹口ラ古志拾集て作タルを
作ルト思ひしと白く行ハ雅まスカラと
用ハく俗ま固余法ハ地水大風室の
其のお仮ま集て人の形ま守も亦只かく乃
とくと初の外ハ事帯と説するん片

今古来松人の葉山子ハ秋風は二の老花
九丁ま毒母つり○さる片の信ま天の
かひらの故る子を引て加茂矢のま之
はりまうの子漢語神代まあしむや

□ ぞんごのおの落る秋風 世を
まお乃行まア流の乃節勝る件ト又古
乃の指ま付りてんと水の落る秋風トハ
又乃の信講ハ田毎の落水のま傍て落る
ハ秋風教伐とまつま秋果るあまの已ま
あまむとまの事帯説のままにり

□ 八月は秋希人のうとお明て りは

まおドクサウクトまするいあな根まを
ま能まくは風吹まく俺ハ件ト又古疑明
ハ指ま付りて八月は秋希人のうとお明てハ
あな根ハ秋おあれ日れとん秋て老の落るハ
りまお明てアア俺のたまりりあじら
とま利のままをまのま行ハ。上五字
あな月トセハあま俺とアハめまむをハ
まままは換りり○固又のまま信ハ

■ 櫛の弁ま相乃落りくる リ
まおつる月も待す明ハあな秋ト又古眺
る又坊ま付り櫛の弁ま相の落くるハ
窓の透るも又まましあまま明すとハ
ま信ハ相成るあまをま指ハ○固風吹ま
りハままあまおと又まむ

■ 初毒よりままぬるはまきあう ち

其の相度うらむ程操の張る位なる作
 又ち又柄の用を付たり相毒うあまぬる及
 てきつゝ村長の内申をなす女こそこの寸
 断より及出程の本陰はれ殺してはつて
 いらぬ相ちやきで無道司志くよちろと忍
 ぶる扱くのみやハ後ト改く一殺まら
 漢うも思ひやじはあ後の辞は打合守固る
 家家の体は二扱く

□ 強う降くるるわ乃はひやむ 牛
 其の白子ぬるは余勿不仕合は清ぬし後
 ト又直後柄の情を迷くう強う降くるる
 のはひやむハ解きうそきぬはささ
 袖を後てきすするうちハ晴上りハレヤレ
 心切は止れしぬも飲寸急てた権をやり
 かつ独笑する扱く固は是共う
 ■ 爪のむきう何種はまざる じり

其の白子ぬるは余勿不仕合は清ぬし後
 付たり爪のむきう何本はまざるトハ
 るは野むの尾一あとは強なるむきま
 子又えうふ南子先を赤め扱く○因何
 子井の畧何書はハ淋く

□ きく子まねと長谷をまたぬ 七
 其の白のむきう何本はまざる時ナリトモ
 シタおすは柄と又直本儀を付たりをくま
 きれと伯康をまたぬト大和山辺郡田村ら
 丹波市辺の白爪作あむ僅二三寸の爪
 きとも灯を赤くしと今も赤指しと
 赤いと乃直の長谷集えて刃を赤る扱く固
 業障なき体はハう

■ 其の白のむきう何種はまざる 牛
 其の白長まう人ニまう子まねとを毛をまた
 ぬは柄と又直又次の柄を付たりコハ長谷を

の意不共様之分子あられしナラ志うむ

● ちんちんと細すそ細 あうまむ じ

あるおち多分遊之婦人寸さ仕合は河とさ
婦人支度せ付たりちんちんと細すそ細し
舞合よ八海のかうま深宿歌て是より深
すこまの娘の仕合よまこん支度して
楽ふとと換投の指おうさむあう娘の
ます七ちむちんちんあうまきまやうまきま
指細くハま細く○深かハ深いトトお
後より固あつたりて果あう件はハあや
換の指は因ちんちんあうハちんちんハモ琳
○ 換投おうり戻り夕月 ち

あるおちまむの指衣裳冬る初ト又五行
列せたり換投おうり戻り夕月ハ町
よりあれの備出神書果てあう戻り
えては町ううおち柄持の三尺帯あう

あむちんちんしてちんちん女事のをち垂て
不自情す指之○固執ハ町家ハはけ白せ
糸の供と又換へなく 衣紋ニ有る意ハ 琳之

○ 町あ守会伝はちの年中 牛
ある独ある換投のうさうあうり件ト又直三
味の念仏せ付たりハ懐衣老の換投は辰
ちんちん換投おうり戻りハ旅して旦那の死
し件ト又直三 聖具と成 尸と袖は入トす
う又換投おうり戻り戻りてお戻り
件ト又直三 上流のそ尾を出て 門の葉
トレテ 糞古様よ 垂るるま戻りまきあ

● 田 ちんちん ちんちん末て換ふ也 じ
ある町あう寸す不の念仏す。尾の念仏
ト又直三 更補の指を付たり 護まき末て換
ふ也 ハ 西行の古治略五尾之不の念仏の不
只後子や略も集て着脱する口と昔を思

合子の手と○固蓋中略柄体むんは挿る

● 人のおおむいふむん

素手町抄子抄巾子人も抄子体ト足立荷

持のきりる体を行く△略蓋黒は刃と付

扱より愛いさる蓋は集るを備法度出る

体ト足立割れの志は身トむのま去ト蓋

白の刃と合紙志と○固紙情と共中比

とては漆封ヲ紙情といひ癖と

● 毛もやほせも十丸たつ

素白人のおおぬみち田カト又立徒は月

日とほる指を行く△抄子柄とあはれる家

おおむ人の主人の常るは能て体む体ト又立

口は日永まわく温泉の侍ト紙情する所と

○固面白く素手刃共人遠と

● よう平の楳子大桶はれ居て

素白はせすと筆で暖氣を弄す体ト又立その

用と付よりよう平のちこ大桶はれ居て

ト徳布おろまきさる糸をかく切

あられ楳下ト大桶入れともち暖まか

て糸をべりとおりもや成れい大もつ寸

とえ退てんある指と○固者くんとち糸

あるん共布おろち考ぬれと

■ 向乃ト云流も又まきぎ

素白楳う下て勢の乃大桶はれおく体ト

又立出来る子の用と付より内交の楳う

下と甘同士の用と店先は楳おろおろ向

の家ト又ぬ煙を乾るをさるの太もこし

他て指はる向と子とりつちと合入あを楳

素仕あは換扱せぬといふ向の不肖はちよ

と家て束む大桶は戻せり居られこと糸

船内交の出や指と合ハ刃の程もて付られ

い波い正面よえる平定法と○固括て楳トよ

あるをやは又とすはまゝとて大桶に押し極
うらむ海あきや

■ 買込つて来て買代するし 牛
余の白液も又とぬき書ふ法盤ある人又と
唐あつて信する指を行く買込つて来て身
代するし大石の如く和子の目途遠より
妻村は拂つて大換とあり朝夕其法のと
仕りぬと云ふ日ばかりの持ちを信する者も居
ると来つたりと痛くぬ口を又と指之○固
二百一息は又換の位也

■ 海よりきつてきつてはく
固あつて買代するし店さすむ件又と
指の如くさすり海よりきつてはく
くよとの逼迫を新に別傳のときも
早くと思や件くれば新来も来て下を
る時をさすり海より

□ 秋の暮のせまきりし秋の暮 七
余の白液のときの時をえてあつて思ふ件又
と指の如くさすり海よりきつてはく
の暮よと云ふ出書さすりし利月さすり
と云ふは新の暮の暮拾はれ我も
ぬて海心と云ふ指之固再出て午後は
■ 杉の梢より月くくも也 八
余の白木下の暮は遊遊しては及の暮は利
は云ふと又と買代の指を行く杉の梢
月くくも也八飲助とも云ふ門は居居て
海より杉木の宮まで休むと遊臥
半の暮は又と買代して互に起し上り
下りいへる葉の虫乃膜眩も其暮の暮
下はさすり海より杉の下はさすり
アレ月う余は又と買代してはく海より
指之○固急病の女抱は又と買代してはく秋の暮は

七三

あるを固くしれと字誤るなり固く皆惑なり

○ 帷子も肩をきぬ異うて

固ある機高人のむく骨おとえ立、又次めを
けり帷子も肩をきぬ異うて、又机
扱てを骨おと一日懸され、吐す扱て

□ 京を扱てあふ子会ひる 牛

京も帷子も肩をきぬ異、又中机扱て
あふ力の机扱れぬ子困る体とえ立、京を云
の女とけり、京を扱てあふ子会ひる、又私
死方ていはいぬ扱て得る子安、又京の
とて、上もして九をの室同扱む、
と一向竹を子と肉をある乳母の在下の床
を扱て扱て、○固く扱てき、びや子異中、後
よき件は、後句惑く

□ 焼おろし、あき、富田、終

△あふ京の扱てあふ子会ひる、は

初とえ立、献立をけり、焼おろし、あき

富田、終、又余の佳者も、又を、あき

む、あき、この、物宅の、あき、丁、あき

よ、は、方の、又、格、あ、田、舎、う、て、ケ、扱、の、扱

お、扱、し、と、色、あ、扱、又、も、△、富、田、△、扱、扱

島、上、郡、と、ま、この、玉、川、よ、え、い、あ、り、を、村、大

尺、う、川、扱、を、あ、く、扱、れ、も、僅、の、も、あ、れ、を

あ、る、人、扱、と、△、扱、扱、△、扱、○、△、扱、扱、△、扱、

京、あ、の、扱、の、△、扱、屑、扱、と、ま、あ、と、え、立、あ、き

● 際と次返てり、あき、扱て来る 牛

あ、る、扱、お、付、の、扱、六、十、文、あ、く、子、扱、出、扱、理
と、え、立、あ、き、あ、く、人、と、け、り、際、と、次、返、て、今

日、も、扱、て、あ、る、△、扱、き、川、の、扱、理、店、と、百

扱、出、扱、の、上、も、二、合、引、を、扱、造、て、あ、き、扱、

あ、る、あ、き、あ、と、口、の、あ、き、扱、き、あ、き、あ、き、と

り、て、あ、く、大、扱、の、あ、き、扱、あ、き、あ、き、○、固、扱、

片原字のまゝに

□ 髪髪を洗つて髪踏するは髪踏す
余の隙を縫てりふも縫て束るはんは連は
詞と足立小下靴き手扱を付たり髪髪を洗
髪踏と手り只扱こそはまぢの坊う髪髪を
の扱はそちもせつとや積てをるの
はマア事但敷の内く縫はあく扱てせつ
と苦れまんとい子供を別する敷方乃
敷川上手あつ扱て固小僕と比る扱扱は
ハヤ

ヨキノ方ヨリイハ舟ヲシム
□ 先仲をせり入舟

▲ 翁白髪髪の子子言踏た手り只扱て
着て跳し体ト足立戻舟ま扱を付たり仲
の方よりい舟と入るトハ約束せり子乃
せつと束とせつと束は毎日出て仲の方
又てアノ舟と書踏跳と舟であんを敷ん

またり扱て△先字あはまありは仲の方
よりい舟と入るト束と一〇固子供勵
て掃拭さす舟向はは忙也

● 内より葉う知るもむの度 是
▲ 翁白山扱て入舟入る体ト足立舟南冥
扱を付たり△只入る扱はあゝ寝い先仲と
片手扱来々扱まゝ扱書船とまの体ト足
立〇二統は翁も付るは戸のむと付く
仲の方より△翁白あゝ又付方あり

○ ちりとも風の吹ぬぞ余さて 是
▲ 翁白むの度の腹あつ体ト足立天を付
たり△後者忘付たり寝い内てより△片屋の
花の度は扱子足は扱を付たり△足〇花
の端よりすゝくトセハ連ぬむよりむ
そこうようむと扱持り扱たぐはりす扱
とあり扱糸の情変化せむは甚余あつ

多きあふは葉中の方より居る

神宮月夜は川を居る

振美のガシ良あつ松子講 翁

▲振美ト下やくと觸つ振あつくくる
古家のおえひ守講ト下を喰ぬトと
とのきやくえ振さくはお思あふよさる
るもあぬ田舎の物人振あつくとて
おあぬ方の良あつと下居る
○固はあふよと守下の持あぬの市
あつ良あつと下居るト下居る
は良あつはあつと下居るト下居る
と下居るト下居るト下居る

■ 降ては休む時をさる形 伊

ある振美の良あつ終日不仕合あつと下
又置今入不仕合あつと降ては休む時

すう朝よあやまくのあつと下居る
晴れい出あつと下居ると町中と下居る
は振あつく下居るのあつと下居る
又振あつく下居るのあつと下居る

■ 審通う櫓の小きと引く

ある村時るの時つ休つと下居る
はする体ト下居るは又下居るのあつと下居る
をけり審通う櫓の小きと引く
る櫓木の振さくむを傷あつと下居る
挽あひるの室お恨独あつと下居る
ある通の休むはあつと下居るのあつと下居る
て休まむやあつと下居るのあつと下居る
振あひる休む振さくむを傷あつと下居る
るト下居る櫓ト下居る

□ 斤兀山ノ月をさるる子 牛

ある根挽をさるる通の株を抱て七ツ休
するさて小根挽をさるる休むはあつと下居る

夏次の初を待たり斤兀山は月をえり
下山古の善法之大工の一人は月をえり松子
ると小言換りしりる時一は兀山より
月をえてお身しては掛するを西海より
善法行りのお身海の禪門の宗人より比
て昂貴し大工の世体を視察する掛也。
夏種良書の他世初は大工よりい木換と
もいむは今の善道といふ初は方彦仲
の善とて守りて入るはと私身は拍子良
挿多し善道下善より善は又は二をを
善一とて又余情も変化も染も多き
善とありむ血脈お麻の人より仮初乃
者より失あれ人々掃行を待さむや
□ 好むの候を待さぬ秋の風
善も斤兀山は位て月を友する位者ト見
五月ははるおを待たり好むの候を待さ

ぬ秋の風よ劉伯倫の友あり候後頑
作る雅人ありむ固葉門共し

□ 別木の存き固乃善書
善の強きぬ毎日解の純まは振おの致
く件とて是候むす掛を待たり別木のおき
玉の善書は人の口助けて秋風をきま
儒の大別木は込まんぐ谷下林ある
をえて善のおきりてはけい山家あれ
木は口とてはさるれちとありぬぬを
いふ振も△は振出ぬり候の中を思ひ出
付られむ彼玉い中候形程とておるお
は調てはの善もせり○固附礼書は
解梅のるぬ待りて固附解を待すは善の
妻とてはさと木は存きふも位よりと改
りは挿也

● 綱の老道つ舟は声そて 牛

集る別木の母き云々 別木舟上又迄俟船押
 付て柔るる船を付たり△は白高船寄付
 ちらり愛い木母きせりよ高船おら整
 くまふ内河と又△船位せりともふり
 ニツまてよハようむ○果つぎハハハ
 ノを換あむつぎ△ハお後守因俣人の
 海面は綱張るる矣とす人時向う走束
 る舟の船の声をきて綱の中を穿きぬ船
 は楫を止て其方へ綱の西端は浮橋あり
 又と目方へ楫をひきりて除ゆく海へ
 往束俣へ私るあれいれむ信也只次句
 の信は海去るる舟年々遠らむ

□ 甲子年八月八日 辰

集る綱の老を信く舟は楫好まの声をき
 上又直周おと付たり望まて又くす廿八日
 八月入せり早くておまの船船をよ

りてきれりるるきアハハハと綱
 舟其の声をきて楫止させ取のるる危う
 りと云あふ船に因て依昆記正昔に廿八日お
 もするる止守は初とえりりり

□ ひるまの陣は早の犬る事 翁

集る日まて又守りあて天文と占りける件
 ト又直取付仕るる船を付たりひるまの陣
 は早の犬る事アハハ決軍腰兵根十分は
 船と大下知する船必務の利と云換
 一人の故と合てる言を鞠一人終す困え
 する件に○固五月廿八日勇我の仇討に因本
 教ち合我之次の流るる流るるの風は換る之
 □ 流るる乃勇は難読もせぬ 尤
 集る兵根そくは秘傳の戦ふ事もあく
 手と末るる件ト又云て天の難文を付て
 り流るるの言は難読もせぬハ流るる

甲曹そ不便てきれをこま入おきりて
 飛舟身海にゆるを衰とてゆるまおの情
 を述べり(固者の執向ても自作し用と結
 へ)其位と(因云流者去とす)其老
 の秋製衣之(固)おもかれ情あて後くま
 去の次母より最厳位之依万葉は漸ちと
 ておこも去も泳ぐる情のそく能とせり
 者もそ去者へのくすおと連りされ
 漸次の連を存て去去のあはれあへ
 強て位をい保きを流す去とすき扱あれ
 と記すそあも去去ある上は古例も
 去るあれは流す去も定まらる

□ 明者む等挑灯を吹けり
 余の流れは身よりウタモウハズ難後りせぬ
 体上又立ちあせきをけり明者む等挑
 灯を吹けりてハ持松仲るの視せき言

うをてり返るも守挑灯流つてさく
 昇ゆくさきりんよりいのと実を扱へ

□ 肩痺よめる湯屋の言月菜 是
 余の余の明者むを等昇のお情件は
 立建揚は体むる用をけりけんへさまえ
 る湯屋の言月菜ハ等昇よ不仕合の持端
 之帯よ用意しる湯屋言月菜れ出り家
 強てこれよお持り扱むいお明をま徳佈
 の終乃きれ扱え也(固)奪て二言月菜
 作れり其並おこ

● 上座の干葉初むも上のま
 余の言月菜強て両れ扱る件上又下女の
 干葉きる扱をけり△もハ況在あるを
 強くる件上又△言月菜之定ハ湯屋よて言月
 くもる件上又△扱は守言月菜の日
 上ハ言月菜よ入一人のそこの言月菜おこれ

と子扱あむむ上置大椀のすちち米飯を
り又上置菜文の麦飯をさく生煮て飯すを
何椀之とも米飯強きとてそをわとにまこ
る法も老家古今の風也

■ 子出ぬ日を内で意する 箱

奉の上のまき干菜切つに後こ通あき
ト又立其お人を付たり子出ぬ日内で意
るトおまこのる何男之干菜きる向子香
作居て子法奥の批合す扱田舎
意の外すも処さる芳お徳の意に似たり
と他より名やの扱之調書始さる士の意と
りも上置の干菜よまをこむと汁
さきめて湯るとしる宮女のお扱もん
あたら芳らむゆい意の仕法をえて意の
風雅をたたりト替りたり○菜扱宿を
同治の下女は食事を考ぬ也

■ 扱賞のセツはくを考居て 牛

▲ 扱白子出ぬアノ日以内て意する男ノ
扱扱扱ル件ト又ち考を考扱を付たり
扱賞のセツ下を考りニ考居てト垂り
ひ亦毎日治る条仲賞とノ商人の扱
一束のいりもセツ下り考居て日扱又
考とモシ考はるいあといある日い扱
賞の扱も扱んよ考居る扱と替居る
扱はる考を考も考居る扱と考居る扱
りの扱と扱をト考居る扱と考居る扱
○ 扱扱賞のセツはくト後子出ぬ日
はト又考居る考居る考居る扱と扱と扱と扱
オマキルと考居る扱と考居る扱と

● 扱は門あり五十二取 扱

▲ 扱のセツは扱賞の条とる扱の門より
声は扱の件ト又扱門は考居る扱と

るしねあまのりよあれい愛い徳費よ財
をなす件ト又ち郡上一三三をきき下
着トセハ言ふ山人はの夕暮を撫すり拾あ
らじ又人とりあふ所へ何白もあむむ

■ けき山の怪鬼もききす月とて 霜

雲の白き楨園は門構るい吹南風防く島
舟のの鼓ト又ち文人の勢を分りけい島の
うきもききす月とてむハ固文武子富る人
松子怪りの高妻もきき抱て休る風情
こり△はるおお島どの國を揮りる世長
あじもまの余白懐トそも人の伏する
役人あつむの四連舞之の傍に挿多の園
かきちくせも抱るるさき色

□ 砂よぬらこのうらまき草よ ち

雲のけい島のききき花の度は月出るとき
抑て抱す件ト又ち又城の狼をけり砂よ

ぬらこのうらまき草よハそり母の懐きき
よ島の子乃裸そ抱り起つ砂抱する
正よりて得菜貝拾ふ投あそりて愛い
暖てお然あとおつけ持する拾之固海
母の子のむらよあ抱ふは

■ 新畑の菜妻もあつて高の上 登

雲の凍るる砂よぬらと移きよの件ト又ち
高船をけり新畑の菜妻もあつて高
の上ハ川原の新果之配をけ殿あえの
上よ高船砂を隔り高船おのうら高
き持故もち高村原去陵の拾

■ 吹とれける望えよ也き 牛

▲ 新畑の菜妻もあつてとくりよ高船り
くす件ト又ちまき抱する子をけり吹と
ちねる望えよまりハ高妻まきと吹ちき
とき一望をアしくとるる高畑中よ高

られ天井をうらまへりてゑりてさむと
すりて又あさうあさうけされ南むと
と思あうとると思の傍とさるる葉を
考ふ痛れは是二ツ後とると名ふ指し

○固来風の時候は二枚

□ 川越の葎の氷をあさう
あま吹られぬる筈なりナカラテ又併
と又ち他より実子指を付たり川越の葎
葎のものをあさうり吹られぬる葎の川
中へ落て腐るをヤレトれよりあさう葎た
けある傍を思てあさうするもま思ひ意
隊よりりりり戻りせぬと又て川越して
はらふまらばは法なるもさ指しハ
よ又と指置ても辞を解てめて葎結すあ
さうをさるる葎トトテリ○固二百一併は
ハ行ラ由ト初テ思ひ思ひ川越まほさ

る人只ハるは之思ひいふてとるや

□ 一平地乃寺の傍に敷地 菖

▲ 川越の葎の氷を又テ千タニあさう
る体は又用いあきなを付たり平地
のちり落き敷地トトテり低き川越乃
ち之川あす人とい方より又て今一尺あふせ
い落き敷きれて氷あふれむとあさう
る指し○固落き川越は又ハ併は
中の併は思ひ思ひ

■ 千おを日向の一方にきりて 是

▲ 糸白世帯も落き敷地の平地地ト又ち
小ちの用を付たり千おを日向の一方にきり
せてト大根の切干あむ敷の張守り方
本堂の落き方ハ和尙の独りまは思ひま
てあす指し木田舎の敷地ト

□ 檜出守名足の芭布とくあり 是

会おのり下ニタシタル器ノ干おを日向の方
一ツツツセで口向と又立又次の用を付く
後出する危の危をくみ解トハまぶる危の後
出さるゝおくと桶の鶏をさるゝをてつて
らせのけ危の解はお及アむとそまふ年が
後子嫁のまい何と向々ま掃の掃
解の口合後ま忙き件又も△ツツツセはナ
るまおとんくろまおまはれ菜を付
後を失て又立すこま一かゝる又立の財は
のおを付くろく口法之○固備信の干おと
又て危と付くろくハ掃家

□ 昇用は浮世をさる系位ハ 翁
会おのり下ニタシタル器ノ干おを日向の方
一ツツツセで口向と又立又次の用を付く
後出する危の危をくみ解トハまぶる危の後
出さるゝおくと桶の鶏をさるゝをてつて
らせのけ危の解はお及アむとそまふ年が
後子嫁のまい何と向々ま掃の掃
解の口合後ま忙き件又も△ツツツセはナ
るまおとんくろまおまはれ菜を付
後を失て又立すこま一かゝる又立の財は
のおを付くろく口法之○固備信の干おと
又て危と付くろくハ掃家

オイヤ何の以去産を林大寸のぢや海
は常正の法之言られい世帯持も勤
定をくろ一向の解ひヤキ毛手と打明
の解之○固田舎よりゑ末おの解は
一と引解くろ昇用は浮世をさる辛
き系位之ハ一初之志と云てん女解

□ 又さるゝあゝは娘 麗子 七
固おのり系は昇術指南として著す人ト又
立▲又も解てあるを付くろ又さるゝあゝは
娘産ふハ先妻の子ある上は後妻も解
う上よりむ指子守てけ方へ知せらるゝ
又出来さるゝあゝは先生ら昇法沙不
斗ハ口内文を継子昇ら上るとゆき娘之

○速尺書 意 共 流 之
■ さるゝと大腕も尺の陸 存
会おのり又さるゝあゝは先生ら昇法沙不
斗ハ口内文を継子昇ら上るとゆき娘之

候集と持集あむりき月更の山原日と俤
あけ乃強きぬふふを一杯きくごとお後き
るま精進をも僻勢のいけ方の僕師の近
店そちちよろくと立飲てまきま彼方ち
松うぬ舟をく先くゆく徳くまらぬ又
とり戻りぬく○固生碎のりツ戻は
すの松は八種をぬ

□ 乙未もも花の三月中時分 辰
集あむ月更集社連のサソ下更後更ト又
立勢たを分りてさころもむの三月中時
分よりいけぬまの集もむ更て面白のま
そく村舎ぬかおてくの敷い映りも映り
只わて集ぬを種と夜法すも物極度底の
尻をき指く○固生字あい集りの写り片
但更と字子のらんを

■ 梅炭のちりを掛ふ喜風 牛

集あむ三月中時分半暖ある俤ト又立花の
俤の用を分りて松炭のちりを掛ふ去風ト
八種のお舎の集も切炭炭て底のむ社中
ま干くると又て暗あれいさまも炭炭度て
おとまき入吹す指く△松炭にキ用れも
まの結し明炭よりてまよ用くはまよ
三のまよ方のまよは次のまよにまよ指お

六

雪松松をれ口又まの松炭 杉風
▲まの松は枝をれ口をぬむり止て毛程
フウウカト方モホエてキム地スルカナはん△
ハきとて下を結すん地すはは清を
合る方余情は

■ 日の出るま乃春きまを空 狐尾
▲不白強ぬお折の春雪郎りる俤ト又立
朝ゆきと分りて日の出るまの春きま

志ハ松明御止て後升又止てお終る唐才
其の船やけを又てアア多の船明ハ志丹の
中ハあり亦太高くとさ世のあらる松
之○古書後の系ハ後白成也

○下着を二舟渡し打ぬて 箱
▲赤白赤き多きハ岸松き日和ト又止て于お
をけり下着を二舟渡し打ぬてハ固ハ
ハ稀ハ天乳として後人多く出て干葉す
る松ハ○國本白い言ハの松をくりく云
より松ハ多きこの玄妙教するハ余あり
かる松なる句を和すハあてカニ又ハあり
才之ハ志言き句を和け句を三通乃至はれ
りハ松松終くハ和日口を止さ古句と信
ハト定ハ我句ハ執念すハハ滅ありや
さる跡として何ぞ後世の下海の正く厚白志
玉を心結ハ行ハハ松の松を愛おし

□ 万とぎらしく大久乃松 子冊
▲赤白下着を二舟渡し打ぬて松ハ作と又
直往束支を和り万とぎらしく大久の松ハそ
去の松系より列の通するハハ之あそり
むとするハ又後備通くるハハまごぢや汐の
ひくハハ社会と英揚をて和ハ松也

▲赤白松ハ松の万とぎれて独急く作トハ
其姿を和り万とぎらしく大久の松ハそ
月夜ハハ海松のまじの松もあて後ハら
廣着板悪て向風ハ袖やけに収ハ巾の
正く成てくる日言の松ハ固ハ二言

○ 西采をりて度き畠地 利生
▲赤白病上の万とぎらしく大久の松ハそ
外眺て才む松を和り西采刈えて度き
畠地ハ実通守風の松をき路ハのやれ

此作は流し給そ前後はけきを字も子
用あれは州たてし改く

□ 惣谷の地をきれり秋の水 谷水
余ある畠地は始き守河蒙州は後之の
度地はめく件は是迄出水引し給をけり
惣谷の地切る秋のおよは給存障は地き
き乃も畑も一面の白砂地と成てん細く
着てんちせくは給○固水漫くは給
一石位は水おて畑地しるる合きや

■ 惣谷の地をきりしるる 惣谷
余ある惣谷地をきりて荒川の戻止るる件は
又是より地をの用をけりし給は給て惣谷
うもは比川に留りて大磯の目まも松山限
てけきはけりし給は給て惣谷と侍は給つ
き辺は給て惣谷の惣谷と侍は給つと
給を給て惣谷ありし給は給て惣谷は給

妻よ来しけりて惣谷よりし給て惣谷
宮は男の合あり水後の給は給て惣水
の地をき地をたはまきり○固水給るの
係も給は給て惣谷ありし給は給て惣谷

□ 二三畠を採玉芝ふ門乃畑 せん
余ある未定たるは給は給て惣谷ありし給
又是給は給て惣谷ありし給は給て惣谷
畑は何れも惣谷ありし給は給て惣谷
あれはあれ寸宿をけりし給は給て惣谷
二三畠の採玉芝ふ門乃畑は給は給て惣谷
くきぬ惣谷や干物の店出し給は給て惣谷
お給てし給は給て惣谷ありし給は給て惣谷
え合ありし給は給て惣谷ありし給は給て惣谷

■ 乃乃惣谷のさきなる干物 占圃
余ある二三畠の採玉芝ふ門乃畑は給は給て惣谷
是より惣谷ありし給は給て惣谷ありし給は給て惣谷

おのさるる干およるるの出入は浅深早の
形たはある振い人の案のぞくあつじ△△門
の鳴あれい家そ門の深さをさく

● 竹の皮方端は移る友の束て 乙葉
▲あるるの存おのモにさるるヤウけ干およ
る存と又さ又をたさる竹の皮せつこよ
移る友の束てよ竹皮付あるる存の及端の
美よさるるさえておれ社の皮せつこよ
倍ひあつむとせす振△干おを竹皮とさ
あよ□□すり固は二ちよ

● 稿よ子のさすあのもくく 風
▲ある干タルヤレテ竹の皮せつこよ移る友
の束ては門と又さ△△子の社門をたさる
稿よ子のさすあのもくくよ干さるる竹
皮へちくくとささるるさえてけるて一程
万倍了竹皮もせつこよあつむと集する振

□ 手お老の一人も又ぬ浦の秋 ち

▲ある及通る人の一面の田眺しは比彫稿株
さるる世にと又さ△△稿よ子の社門をたさる
り手お老の一人も又ぬ浦の秋よあさ
け方の家並えてその内も手およさるる
一程もあふ稿よ候村は深まうけよ出て田
は振作よするうけは稿よ子のさす振
いり実よあつう後の村は稿の出束もさく
家並よよぬれる姓さるるをい偏り
と名ける振△△子のさすは秋をたさる
● めつこよ風のちやるさる 利合
▲ある舟その人のたさるる歌又て多夫之
浦とせす件ト又さ△△多夫之の振をたさる
めつこよ風のちやるさる△△風るあさる
美いあふをい家は歌歌て偏りさるる
皆風引をうりておもろくよいさぬけん

あまをうくと作らるる也

● 雪の月をかまて接大工 依々
 ▲ 雪のめつこまや風をぬき子作ト又雪降
 笛人をけり方々の月をかちて接
 大工ハ雪の二行するはるま忘るおはは
 くねとておれさやう春中さるる娘と
 と毎夜おき子の旅衣為く泣きたる也

□ 雪の中へ登る子をかくる
 ▲ 雪の月をの月とて接して故にワ旅大工ト又雪
 身あつたを迷さう七中へ登る子をかくる也
 うらハ内のかげ丁といは娘を春登すと月
 さす旅ト宿の子おせおて毎夜く我
 子の出する旅と固々まも子ありはる

● 茶筌のきまらく上まむちりて サシ
 ▲ 雪の母の踏あつて子の子の束てるさく作ト
 又雪其節の用をけり茶筌のきまらく上

よどおてハ暖子門よもみ茶干てかき
 捜すよむおあつて束てりまむちり子
 のちりりとちりし、旅と固れり

○ バウの雪よ小あゆりする キタ
 ▲ 雪の母のむのトよ干る茶筌ト又雪川
 の用をけり川を雪よ小ち也別するハ
 又雪のあゆむの雪よ、ゆる旅者母の
 川ゆあつて○雪のヨ又バト雪り

● お雪を降てきみよき雛の声 風
 ▲ 雪の川を雪よワるようあゆまき日ト又
 去天をけりお雪を降てきよき雛
 の声トハ向ハ山ある川とさるる雪てあゆら
 新きと名のお降てきよまた大なりと
 と雪降てあゆむあゆ日と新ぬおと

□ せどくは雪を山くむる 水
 ▲ 雪の日和なあれは雪はせむとらふおり

の先初く十分は降くせむ五俵之俵で
是いせしと此守拾へへ字定は難之の
汲次は俗語の汲之固より

■ ワギンくマヤて葉代のれ 依
▲ 糸白粒米を俵に斗込て持束を付ト尺
を尺板を付たり葉れは俵米米をむと
中々取又の末此四内より人々ふられ
と擲て持束ををきつく結てを尺上
の葉板の山若若下されと医河の内交
の葉ふ拾え西の人情をそりたり

□ 両舟であくは自勝す也 ホ
▲ 糸白粒米を俵に斗込て葉代は下されおき難
ぬは尺上を尺板を付たり両舟であ
くはと自勝すはちし上舟始末の床
の五地又ては両舟は性うんうとやられ
いよん所を是い去舟の交うたはてを

葉れはやるとそ舟内は正葉の両舟はワ
きく持束を下されを並は表はしと
の七や是ら両舟であくは世は両舟はあ
まんと自勝すは拾へへ葉れは葉ま
も難く是は換立の初と親情で替ふ
人を二白のちま合はるよき葉れは
両舟の松竹梅を引張てナト作ら全麻
あむの固葉と又て葉むは片両舟は古
葉と又換はる古葉は次の白あま

■ 隣へりて大をたて束る せ
▲ 糸白粒米は糸白自勝きて五斗一斗ト
又五尺用を付たり隣へりて大をたて
よ古乃くやの店先は葉人は自勝の古葉
又せはコレはあまこの大は倍と大合て
隣へり拾へ固乃く店は

□ 又葉も佛の飯で持はぬ 是

おの隣の大を苦ふい大を焚ぬ体ト又之
友人を分るり又及も仏の版で傍あむい
程傍あむい独傍之にお版焚あてい出運
せおの隣焚あ焚て素を佛いよ
上へ佛版て仕と置い托鉢のり先を喰れ
秋のと炊く其りししの殆くの地と即上テハ
食後よ大を苦ふ招てあれい傍あむいト
改くいおむいハコラムは自向もありコラフル
テアラウは傍もあれいお傍置固く

□ 換をくりしてかお焚あり 風
おの又及も仏の版で傍あむい余は
の傍ト又及傍之を分るり換をくりしてかお
白ありよおの男いさるい勤定家でも
利發教よ吐せいちと報設せむおを名の
言い抜目傍何をりも換をくりと異ふ招
て固換をくりよ傍の言いせぬ換のいとい

もく換一節の傍くるまあるり○固お傍あ
こは後句然し

■ 大板の人よすれくる冬月 合

おの換をくりしてモア焚あ初件ト又板
思三思ル 件と又及お舎の人情を分るり大板
のモノ人よすれ^{ト井ル}冬月トハ舟向屋子
らむい人すれて冬月のお濡きまも大換
して大さお焚て又人をたしてえつくワイ
と跡まの尾とえり又草を焚て版版の
ろくろめくくもよ招く○固月と又て又又
あは換りし

□ 傍を止れお祖母の言ふる

おの又大板の人よすれくるモア冬月トハ草抱
出来ルは初と又及人お草を分るり傍を止めれ
お祖母の言いよるよ大板く田舎く欠落し
ては是むくの書子と書くるよ傍換り

何れ守と媒はかたれいさるるあるまふ二言
幸抱せよとや付くれ田舎と目はお見えを
中も飲されいぢくのきんむの打書一拾
固欠後入教卒共うー○園園とせれとアル
ハ此れいぢくは字後りむ

□ 櫻乃ぬる山家の箱の兀くうり サシ
余も林家ゆとててそのきんむと又さき傳
の拾を付くう櫻乃ぬる山家の箱の兀くうり
初より夫之村守男の仏檀の保めきよ唇れ
うらよそあをを比林家ゆとてて牡丹院ま
しつは止つて合う悩るとわくのきんむイヤ
私を林家ゆも九年逢ううけ仏檀と口の中
でモウ兀くうて余をあられい金支もすま
とあふ拾へ○ぬるハハハハ方方ー固返は去
よん年うらハ悦也

■ 次乃小初をて言まむる声 は

余も兀仏後あぢく勿体ぬ社生の教諭を
屏来お下よさむげとえさ更は拾への板悩
を付くう次の小初やを言まむる声ハ狭き
高家の仏乃の後あふ小初者よはさき若伯
せつらう梅返て候くを蒙せちき候も更
て着登するまの今のさむげとて笑悲て
むせぶのをと考つと声ひそめて物くるは生
教と栗木柱の邪まぬらき賣る也 ○固
朋孝の笑懐る高家の箱は自他遠く

□ 約束はあてを言ひ候もそれ う
余も白次の邪をむせむ妹まのうと並初や
うあする件とえさ余山の良きむ情と迷さ
り約束はかみてきうて候もそれハ男初を
の次の初初を思て下女主人の原き候
は候つくを袖は思ふきうて候もお互に
しは隠さ守とけ板を付くうよらうまを

五條のりそとワ子振の〇を^{ツカ}わす云
は作てゝ前後は竹子^{ツカ}を^{ツカ}りて上改て

■ 七ツの儘は如き梅^{ツカ}す来り 凡

▲あつ物木^{ツカ}身^{ツカ}雇人^{ツカ}のとく^{ツカ}起^{ツカ}肘^{ツカ}刻^{ツカ}まる^{ツカ}方
板^{ツカ}ま^{ツカ}それ^{ツカ}件^{ツカ}上^{ツカ}又^{ツカ}立^{ツカ}竹^{ツカ}得^{ツカ}格^{ツカ}を^{ツカ}付^{ツカ}て^{ツカ}り
七^{ツカ}の^{ツカ}子^{ツカ}は^{ツカ}如^{ツカ}き^{ツカ}梅^{ツカ}は^{ツカ}来^{ツカ}る^{ツカ}ハ^{ツカ}肘^{ツカ}尺^{ツカ}遠^{ツカ}て^{ツカ}ハ^{ツカ}ツ^{ツカ}は
起^{ツカ}板^{ツカ}を^{ツカ}て^{ツカ}待^{ツカ}作^{ツカ}る^{ツカ}は^{ツカ}術^{ツカ}得^{ツカ}の^{ツカ}七^{ツカ}ツ^{ツカ}あり
と^{ツカ}板^{ツカ}て^{ツカ}梅^{ツカ}は^{ツカ}来^{ツカ}れ^{ツカ}ヤ^{ツカ}し^{ツカ}時^{ツカ}と^{ツカ}鳥^{ツカ}杖^{ツカ}控^{ツカ}て^{ツカ}出
申^{ツカ}振^{ツカ}△^{ツカ}あ^{ツカ}の^{ツカ}板^{ツカ}推^{ツカ}察^{ツカ}あ^{ツカ}れ^{ツカ}定^{ツカ}ま^{ツカ}て^{ツカ}板
ま^{ツカ}それ^{ツカ}人^{ツカ}を^{ツカ}付^{ツカ}て^{ツカ}り^{ツカ}○^{ツカ}固^{ツカ}小^{ツカ}宿^{ツカ}の^{ツカ}斤^{ツカ}得^{ツカ}り
持^{ツカ}る^{ツカ}格^{ツカ}は^{ツカ}厚^{ツカ}字^{ツカ}の^{ツカ}或^{ツカ}也^{ツカ}

■ 花^{ツカ}の^{ツカ}馬^{ツカ}年^{ツカ}さ^{ツカ}ち^{ツカ}は^{ツカ}降^{ツカ}出^{ツカ}て^{ツカ}り

▲あつ来^{ツカ}る^{ツカ}身^{ツカ}ツ^{ツカ}カ^{ツカ}肥^{ツカ}わ^{ツカ}る^{ツカ}向^{ツカ}う^{ツカ}正^{ツカ}當^{ツカ}梅^{ツカ}は
房^{ツカ}の^{ツカ}件^{ツカ}上^{ツカ}又^{ツカ}立^{ツカ}て^{ツカ}又^{ツカ}の^{ツカ}格^{ツカ}を^{ツカ}付^{ツカ}て^{ツカ}り^{ツカ}む^{ツカ}又^{ツカ}の^{ツカ}馬
ま^{ツカ}は^{ツカ}ツ^{ツカ}カ^{ツカ}又^{ツカ}の^{ツカ}係^{ツカ}是^{ツカ}の^{ツカ}馬^{ツカ}を^{ツカ}さ^{ツカ}ま^{ツカ}ち^{ツカ}の^{ツカ}か^{ツカ}格
い^{ツカ}み^{ツカ}を^{ツカ}押^{ツカ}や^{ツカ}出^{ツカ}す^{ツカ}度^{ツカ}は^{ツカ}あ^{ツカ}ら^{ツカ}ぬ^{ツカ}す^{ツカ}あ^{ツカ}ん^{ツカ}は^{ツカ}ら
し^{ツカ}き^{ツカ}あ^{ツカ}る^{ツカ}正^{ツカ}當^{ツカ}や^{ツカ}す^{ツカ}あ^{ツカ}ま^{ツカ}ん^{ツカ}と^{ツカ}お^{ツカ}後^{ツカ}す^{ツカ}る
を^{ツカ}イ^{ツカ}ヤ^{ツカ}り^{ツカ}あ^{ツカ}ら^{ツカ}ま^{ツカ}ん^{ツカ}と^{ツカ}せ^{ツカ}又^{ツカ}△^{ツカ}年^{ツカ}は^{ツカ}う
ち^{ツカ}ち^{ツカ}し^{ツカ}と^{ツカ}降^{ツカ}出^{ツカ}す^{ツカ}向^{ツカ}た^{ツカ}を^{ツカ}自^{ツカ}身^{ツカ}せ^{ツカ}き^{ツカ}戻^{ツカ}来^{ツカ}る
丁^{ツカ}推^{ツカ}又^{ツカ}て^{ツカ}ソ^{ツカ}レ^{ツカ}ヤ^{ツカ}丁^{ツカ}を^{ツカ}正^{ツカ}當^{ツカ}梅^{ツカ}は^{ツカ}来^{ツカ}る^{ツカ}ワ^{ツカ}と
急^{ツカ}用^{ツカ}急^{ツカ}す^{ツカ}格^{ツカ}の^{ツカ}運^{ツカ}付^{ツカ}も^{ツカ}固^{ツカ}す

■ 田^{ツカ}力^{ツカ}又^{ツカ}は^{ツカ}梅^{ツカ}菜^{ツカ}拵^{ツカ}り^{ツカ}す 水

▲あつむ^{ツカ}の^{ツカ}俵^{ツカ}は^{ツカ}年^{ツカ}は^{ツカ}う^{ツカ}ち^{ツカ}降^{ツカ}れ^{ツカ}い^{ツカ}あ^{ツカ}ま^{ツカ}て^{ツカ}
梅^{ツカ}の^{ツカ}件^{ツカ}上^{ツカ}又^{ツカ}立^{ツカ}て^{ツカ}又^{ツカ}用^{ツカ}を^{ツカ}付^{ツカ}て^{ツカ}り^{ツカ}男^{ツカ}又^{ツカ}は^{ツカ}梅
菜^{ツカ}拵^{ツカ}る^{ツカ}上^{ツカ}は^{ツカ}梅^{ツカ}の^{ツカ}蔓^{ツカ}拵^{ツカ}は^{ツカ}連^{ツカ}立^{ツカ}り^{ツカ}降^{ツカ}出^{ツカ}
あれ^{ツカ}は^{ツカ}子^{ツカ}梅^{ツカ}む^{ツカ}と^{ツカ}梅^{ツカ}拵^{ツカ}き^{ツカ}女^{ツカ}の^{ツカ}ち^{ツカ}お^{ツカ}す^{ツカ}ら^{ツカ}う
ち^{ツカ}あ^{ツカ}は^{ツカ}あ^{ツカ}い^{ツカ}れ^{ツカ}草^{ツカ}交^{ツカ}は^{ツカ}ま^{ツカ}う^{ツカ}又^{ツカ}梅^{ツカ}て^{ツカ}み^{ツカ}か
き^{ツカ}て^{ツカ}拵^{ツカ}り^{ツカ}あ^{ツカ}ら^{ツカ}ぬ^{ツカ}ハ^{ツカ}二^{ツカ}反^{ツカ}年^{ツカ}あ^{ツカ}ら^{ツカ}ぬ^{ツカ}お
を^{ツカ}と^{ツカ}又^{ツカ}拵^{ツカ}△^{ツカ}は^{ツカ}老^{ツカ}初^{ツカ}あ^{ツカ}ら^{ツカ}も^{ツカ}後^{ツカ}お^{ツカ}力^{ツカ}あ
り^{ツカ}梅^{ツカ}拵^{ツカ}あ^{ツカ}ら^{ツカ}ぬ^{ツカ}梅^{ツカ}菜^{ツカ}拵^{ツカ}中^{ツカ}の^{ツカ}拵^{ツカ}お^{ツカ}こ

炭^{ツカ}俵^{ツカ}注^{ツカ}終

	△	○	●	□	◇	■	●	□	□	■	■		
五	二		二	三	一	五		五	九	二	六	○	両、 三、
五	一	五	一	三	二	四	三	一	六	五	四	○	三、 一、
五		三		三		六	一	六	五	四	七	○	昂、 一、
五	二	八	七	五	一	六	八	七	六	七	五	○	三、 三、
五		一	一	三		二	二	六	七	八	一		両、 三、
五		二	三	一	二	八	二	四	十		三	○	一、 三、
五			三		三	五		八	七	三	六	○	昂、 一、
、				三		五	七	六	八	二	四		三、 一、

六

両、
三、
昂、
三、
三、
一、
昂、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

三、
一、
一、
三、
三、
一、
一、
三、

